連合

ゆにふぁん レポート

Stand up

～ゆにふぁん２年のあゆみ～

R&PV

目　次

巻頭言

想いをカタチにつなげよう　―ゆにふぁん公開から２年と今後の期待―　…… 1

ゆにふぁんとは　…… 2

活動の振り返り

数字と写真で見るゆにふぁんレポート　～２年のあゆみ～　…… 4

事例紹介

01　自動車総連

自動車総連の福祉活動とゆにふぁん　…… 20

02　連合北海道

コロナ禍の取り組みとゆにふぁんの活用　…… 22

03　公益社団法人ユニバーサル志縁センター

ゆにファンディングにチャレンジ ～若者おうえん基金～　…… 24

パネルディスカッション

想いをカタチにするために　…… 28

ゆにふぁん応援メッセージ　…… 48

おわりに

「ゆにふぁん」で支え合い・助け合いの輪を広げよう　…… 50

資料　…… 51

想いをカタチにつなげよう

― ゆにふぁん公開から２年と今後の期待―

日本労働組合総連合会　会長代行　**逢見直人**

2015 年・国連がＳＤＧｓ「持続可能な開発目標」を採択し、「誰一人取り残されることのない」を共通の理念とする 17 の目標の実現をめざし、政府、企業、労働組合など各種団体、個人が、持続可能な社会にしていくためにどうすればいいのか、貧困や環境問題、福祉の充実、ディーセントワークなどについて考え、行動するようになりました。連合もこの流れを受け止め、多方面の運動をすすめています。その一つにゆにふぁん運動があります。

2019 年 10 月にスタートしたゆにふぁんは、この 10 月で丸 2 年を迎えました。ゆにふぁんマップも今では 400 件を超える、支え合い・助け合いの活動が掲載されています。活動分野ごとで見れば、福祉施設のボランティアや物品寄贈など「障がい･介護を支える」活動は 100 件を超え、山林や街の清掃を通じて自然を守る、フードバンク・子ども食堂を支援して貧困から守る活動など様々あります。READYFOR と連携したクラウドファンディングは５件、すべて目標を達成しました。そのうちの４件はコロナ禍による何らかの影響を受けてチャレンジしたものです。

ゆにふぁんを通じて、労働組合の活動が伝わり、身近に感じたとの声も聴くようになり、ゆにふぁんが浸透してきていることを実感するとともに、改めて、みなさまに深く感謝を申し上げます。

2020 年からのコロナ禍で、貧困と格差は拡大し、困難に直面している人たちが急増してきました。そこで、昨年 6 月から、ゆにふぁん特設ページを立ち上げ活動の見える化と参加につなげるための発信を積み重ねてきました。「雇用・生活を守る」ための募金活動や、「感染拡大を防ぐ」ためのマスク・医療用具の寄附、コロナ禍による誹謗中傷をなくそうとシンボルマークを活用した取り組みなどその取り組みは 86 件となりました。

コロナ禍の経験を無にしないためにも、私たちはこれからの時代の新しい運動をつくらなければなりません。まだまだ困難を抱えている人たちや、地域、社会課題はたくさんあります。こうしたことに関心を持って私たちで何ができるかを考え、想いをカタチにつなげる運動、ゆにふぁん運動が全国津々浦々で築き上げられ、継続されることを期待したいと思います。

ゆにふぁんとは

労働組合やNPO･NGOなどの団体が行う支え合い･助け合いの活動を
WEBサイト「ゆにふぁんマップ」へ掲載することで
それぞれの活動を知るとともに、個人の意思で参加や支援ができる仕組みです。

「ゆにふぁんマップ」でできること

- 情報共有
- ボランティアの募集
- 物資支援の募集
- 募金・寄附金の募集
- クラウドファンディング

社会貢献の分野

- 働く人を応援
- 貧困から守る
- 教育・子育てを応援
- 障がい・介護を支える
- 自然を守る
- フードバンク・子ども食堂
- 地域を元気に
- 被災地を応援
- 動物を守る
- その他

掲載できる団体と構成組織･地方連合会の役割

掲載できる団体

- 構成組織
- 地方連合会
- 地域協議会
- 単組
- ＮＰＯ･ＮＧＯなどの団体
  構成組織(加盟組合含む)
  地方連合会(地域協議会含む)とお付き合いのある団体

掲載にあたっての役割

- 実施団体
  構成組織･地方連合会が主団体となる活動
- 推薦団体
  ･単組･地域協議会が主団体となる活動
  ･ＮＰＯ･ＮＧＯ等団体が主団体となる活動

活動を盛り上げる仕組み「いいね！」

- 頻繁に活動状況を更新することで
  活発なサイトに！
  写真やコメントを更新しましょう。
- ユーザーは「いいね！」ボタンで
  活動を応援！

ゆにふぁんがつなぐ･創り出す･民の力

ゆにふぁん発展に向けて ～ロードマップ～

STEP 1 組織内・連携する
諸団体の活動を見える化

STEP 2 諸団体との
連携・参加・参画につなげる

STEP 3
- 支え合い・助け合いの活動へ参加・参画を通じて共感・喜び・やりがいを感じる
- 諸団体、地域、市民と労働組合のつながりを深める
- 参加を通じて当事者意識の醸成と社会課題解決への行動につなげる

→ ゆにふぁん が結節点に

ゆにふぁん

■正式名称　「ゆにふぁん～支え合い･助け合い運動～」

■愛称　「ゆにふぁん」　支え合い･助け合いの活動を通じて“ユニオンのファンを増やしたい”という想いが由来。ひらがなで親しみやすさを表現。

■ロゴマーク(一般公募)　ユニオンの「Ｕ」を重ね合わせて、人が支え合い助け合う様子と、助を求める声に気付く「あ！」という意味を込めている。

ゆにふぁん動画公開中

「ゆにふぁんフォーラム」

「ゆにふぁんとは」

数字と写真で見る ゆにふぁんレポート ～２年のあゆみ～

ゆにふぁんマップで見える化 ～ 400 件を超える活動

2021年7月14日現在

マップ掲載

計 406 件

構成組織	地方連合会	連合本部
214 件（12 組織）	186 件（46 組織）	6 件

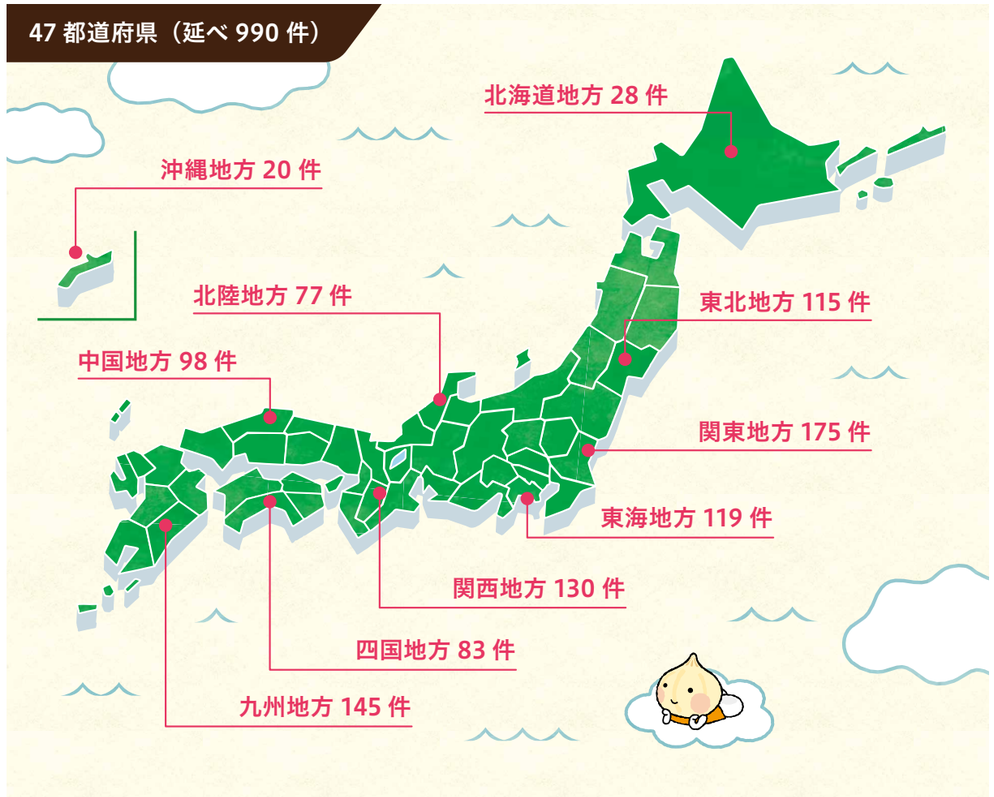
（うち外部団体 26 団体・35 件）

※実施団体・推薦団体登録含む

地域や組織を越えて ～ 日本全国で支え合い・助け合い　活動地域別

2021年7月14日現在

2021年7月14日現在



多様な支え合い・助け合いの活動　活動分野別

2021年7月14日現在

働く人を応援

29 件

フードバンク・子ども食堂

22 件

貧困から守る

27 件

地域を元気に

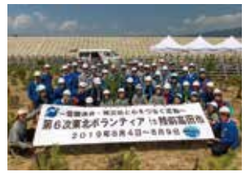
39 件

教育・子育てを応援

22 件

被災地を応援

36 件



障がい・介護を支える

127 件

動物を守る

2 件

自然を守る

50 件

その他

52 件

多様な支え合い・助け合いの活動

トピック①　ゆにふぁんでつなぐ『食』の支援

フードバンク・子ども食堂へつなぐ

- 会議出席の際は、お米や食品を持ち寄り、フードバンクや子ども食堂へ寄附
- メーデーやイベントに合わせてフードドライブを実施
- フードバンクで食品仕分けや発送のお手伝いなど体験学習
- ゆにふぁんで食品提供や募金・寄附金を広く呼びかける

食育・農業体験から海外支援米へつなぐ

- 組合員とその家族、地域の子ども、学生のみなさんとともに活動
- 海外発送に伴いボランティア活動や送料をカンパ活動で支援
- 田植え、稲刈りなど農業体験を通じて「食育」「食品ロス削減」「食の安全性」を学び、収穫したお米をアジア・アフリカへ送る活動

多様な支え合い・助け合いの活動

トピック②　ゆにふぁんの仲間たちと『環境保護』

まちをきれいに清掃活動

- 「ピリカ」システム活用でゴミ拾いを可視化
  青年委員会、女性委員会の前に、みんなで参加
- トライアスロン形式で汗を流し、競い合いながら清掃活動
- カーブミラーをきれいに磨き、地域の交通安全を守る

森林保全で地球温暖化防止

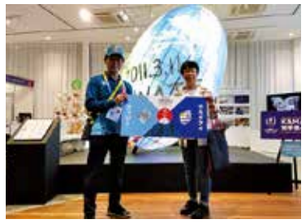
- マングローブ植林を通じて、地球規模で進む環境問題を考える
- 琵琶湖の水をはぐくむために、森林保全活動
- 木材を再生可能な資源に、生物・水資源を守り自然災害も防止

多様な支え合い・助け合いの活動

トピック③　ゆにふぁんが『地域活性』を応援

スポーツ競技を応援・支える

- 地域のマラソン大会に給水スポットでのボランティア
- スキー大会会場設営や計測、記録などのボランティア
- ラグビー大会で観客席でのお客様対応などのボランティア



伝統・文化を普及・支える

- 四国八十八カ所を巡礼するお遍路さんへ「お接待」で応援
- お祭りで山車の引手で地域を元気に
- 音楽レクレーション指導士の普及をサポート

多様な支え合い・助け合いの活動

トピック④　『自然災害』の支援はゆにふぁんで

緊急カンパ・物資支援を呼びかける

- 2019 年 10 月台風 19 号、2020 年 7 月豪雨災害
  被災地、被災者に寄り添う気持ちでカンパを呼びかける
- 被災者からの要望「洗濯済のタオル、吸水性が良く欲しい」に応えて、多数のタオルを届けた

被災地に駆けつける

- 生活復旧に向けて、家屋や敷地内の泥のかきだしなどボランティア
- 行方不明者捜索する犬たちも被災地に駆けつけた

想いをつなぎ・カタチにする ～ 参加型 ～

2021年7月14日現在

ゆにふぁんマップから参加を呼びかけ

計 57 件

ボランティア	物資支援	募金・寄附金	クラウドファンディング
18 件	13 件	21 件	5 件

ゆにふぁんマップから参加を呼びかけ ～ 募集事例 ～

2021年7月14日現在

ボランティア

◆ボランティア募集
公益財団法人オイスカ

東日本大震災の津波で打撃を受けた海岸林再生にクロマツを植栽する活動への参加を募集

◆交流参加募集
情報労連

就職活動する学生と若手社会人の働くことについて意見交換を開催。学生の参加者募集

◆電子署名募集
連合福岡

エッセンシャルワーカーへの差別・偏見・誹謗中傷をなくすため、電子署名参加を募集

物資支援

◆食品募集
フードバンク岩手

缶詰、レトルト食品、お米など募集。児童養護施設などへ寄附や災害時無償提供など支援

◆食品・学用品など募集
フードバンクしばた

食品の他にも学用品や学生服なども募集。母子家庭や子どものいる世帯などに支援

◆洗剤・犬服生地など募集
東日本盲導犬協会

洗剤や犬服（マナーコート）生地など募集。盲導犬育成に活用し視覚障がい者を支援

募金・寄附金

◆自然災害カンパ金募集
連合本部

自然災害被災地へ雇用対策や災害復興の一助とする義援金として寄附するためカンパ金募集

◆若者支援の寄附金募集
連合北海道

コロナで影響を受けている学生を支援するプロジェクトへの寄附金を募集

◆コロナ対策寄附金募集
長野県みらい基金

NPO やボランティア団体が行うコロナ感染防止対策に必要な経費を助成金で支援するための寄附金を募集

想いに共感・活動を応援 ～ クラウドファンディング ～

2021年7月14日現在

ゆにふぁん × READYFOR

連合山口	社会応援ネットワーク / 日教組推薦	ゆりりん愛護会 / 情報労連推薦
秋吉台 山焼き	#子どもの心のケア	生き残ったマツの子を育てる
127 人	154 人	201 人
1,043,000円（800,000円）	1,612,000円（1,120,000円）	1,196,000円（1,000,000円）

首都圏若者サポートネットワーク / 連合東京推薦	高槻ライフケア協会 地域交流センターあすなろ / 連合大阪推薦
若者おうえん基金	高齢者の居場所づくり
520 人	94 人
7,844,000円（3,000、000円）	945,000円（700,000円）

ご支援いただいた人数　延べ 1,096人　　**ご支援いただいた金額　合計 12,640,000円**

※（　　）内は目標額

クラウドファンディングプロジェクト ～ その後 ～

2021年7月14日現在

ゆにふぁん × READYFOR

山口県美祢市秋吉台。魅力を守る伝統行事「山焼き」を続けたい。

2019 年 11 月 9 日（土）
秋吉台山焼き延焼止め草刈りボランティアを実施することができ、550 名が参加。

施設や里親の下で育った若者たちをサポートする若者おうえん基金

2020 年上半期に新型コロナ助成事業など 3 つの助成事業を行い、延べ 87 団体 8,767,250 円を助成することができた。

【新型コロナ】【災害ストレス】＃子どもの心のケアプロジェクト

全国から寄せられたお悩みに対して専門家に取材し正確な回答を継続的に発信。心のケア情報サイトも立ち上げた。

高齢者の居場所づくり・地域交流センターの運営と存続支援

活動資金、感染予防のための環境整備などに有効活用し事業を継続。

生き残ったマツの子どもたちを育てよう！

新型コロナ感染拡大により、2021 年 5 月予定の「植樹祭」の開催を延期。

特設ページ　想いを届けよう ～新型コロナ対策支援～

2021年7月14日現在

新型コロナウイルスによって助けを求めている方々へ想いを届けよう

計 86 件

雇用・生活を守ろう

39 件

- フードバンクや子ども食堂を支援　１４組織
- マスクや医療用具支援　２５組織
- 募金・寄附金寄贈　１７組織

感染拡大を防ごう

47 件

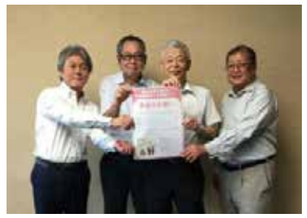
マスク寄贈

480,284 枚

そのうち 10 件

- シトラスリボン
- ありがとうの輪

写真で見る ～新型コロナ対策支援～


高知県労働者福祉協議会

あすのば

沖縄県労働者福祉基金協会

電力総連

JP 労組

日本教職員組合

連合静岡

連合兵庫

連合埼玉

連合東京

連合沖縄

連合三重

連合群馬

連合岐阜

連合徳島

特設ページ　つなげよう未来へ ～東日本大震災から 10 年～

2021年7月14日現在

復興支援・防災の取り組みを通じて震災を風化させない

復興支援の取り組み

植林活動、清掃活動、募金活動など

10 件

東日本大震災被災者支援活動

連合北海道・
石狩地協札幌地区連合会

復興の森

連合秋田

「ハタチ基金」へのカンパ

電力総連・電発総連

防災の取り組み

ボランティアの養成や救命道具の使い方を学ぶ

11 件

救命講習会の受講

JP 労組東海地方本部

災害ボランティアセンター設置・運営訓練

連合福岡・北九州地協

JBU パワーバンク（災害ボランティア）活動

基幹労連

知る・活用する・参加する ～ 情報発信 ～

2021年7月14日現在

Facebook

投稿数	42 回
リーチ数	204,038 人
フォロワー数	10,489 人

Twitter

投稿数	19 回
リーチ数	730,550 人
フォロワー数	7,503 人

月刊連合　全７号
連合ダイジェスト転載
（連合 HP）

Facebook
Twitter

月刊連合
ゆにふぁん連載

ゆにふぁん

その他
あらゆる方法

リーフレット	3,500 部
オープニングカフェ	225 名
ツイキャス	1,500 名

大会・各種会議、学習会 etc

連合ホームページ
ゆにふぁんマップ

ゆにふぁんマップ
アクセス数
延べ **173,166** 回

♥ いいね！
獲得数トップ3

1 位	車両寄贈 / 群馬県	♥ 1,032
2 位	東北ボランティア / 岩手県	♥ 834
3 位	フードバンク / 静岡県	♥ 598

これまでも・これからも…
支え合い・助け合い

事例紹介

事例紹介 01：自動車総連

自動車総連の福祉活動とゆにふぁん

自動車総連　組織局部長
宮澤典子

組織の強みを生かした３つの福祉活動

自動車総連では、福祉カンパ活動のほか、主に３つの福祉活動に取り組んでいます。

１つめが、自動車総連の強みを生かした「車両寄贈活動」です。毎年、労連ごとに予算の上限額を決め、各労連主体のもと寄贈先を選定しています。1985 年から寄贈を開始し、寄贈車両総数は約 1,000 台になりました。

▲これまで約1,000台の車両を寄贈

２つめは、地域の絆を生かした「物品寄贈活動」です。全国 47 都道府県にある地方協議会が、地域の絆を強みとして、困窮している福祉施設に毎年、物品を寄贈しています。寄贈先は、月に１度開催する地方協議会の幹事会で、幹事のみなさんと話し合って決めています。販売店のお客様や組合員のご家族、知人といった地域のつながりで施設を紹介してもらうことが多く、予算は協議会ごとに上限額を決めています。物品は施設からのリクエストに基づいて決定し、これまで車いすやパソコン、テレビ、遊具、タブレット端末などを寄贈しました。施設の方から大変喜ばれる活動になっています。

３つめは、「ナイスハート　ふれあいのスポーツ広場」です。まだ、ゆにふぁんマップには掲載していませんが、自立と思いやりの心を育むことを目的に、組合員がスポーツを通じて障がいのある方々と触れ合う活動です。公益財団法人「ナイスハート基金」との共催で実施し、各地方協議会が企画・運営を行い、組合員のみなさんもボランティアで実行委員として参加しています。

▲福祉施設からの要望をもとに物品を寄贈

毎年実施していますが、2020 年は新型コロナウイルス感染症の影響で、47 地方協議会全てで中止となってしまいました。2021 年は感染防止対策を徹底し、競技内容、運営方法も改めて検討した結果、新たな「ナイスハート　ふれあいのスポーツ広場」として４月に鹿児島の地方協議会で開催することができました。

今後もコロナの状況によりますが、秋・冬大会に向けて活動を進めていきたいと思います。

寄贈先施設を詳しく紹介しゆにふぁんの活用を促進

2019 年にゆにふぁんが開設されたことを受け、自動車総連の中央執行委員会で、12 労連にその目的と内容を伝え、単組への周知を依頼しました。また、47 地方協議会に対しては、定例の幹事会で本部担当役員より説明を行い、車両寄贈のゆにふぁんマップへの掲載を依頼しました。

労連、地方協議会に対してお願いしていることは、活動報告の作成と、寄贈先施設へのゆにふぁんマップ掲載承諾の依頼です。その結果、現時点で 104 件の活動が掲載されています。

また、中央執行委員会では、掲載数と「いいね」数を報告し、新しいツールとしてクラウドファンディングを紹介するなど、さらなる活用を促進しています。

ゆにふぁんマップに掲載する際のポイントは、寄贈先がどのような施設で、どのような特徴的な取り組みをしているのか、できるだけ詳しく紹介することです。プロジェクトの公開後は、労連や地方協議会に対し、閲覧と「いいね」を押してくださいとメールで依頼しています。

組合内外に労組の活動を知ってもらうきっかけに

ゆにふぁんマップへの掲載をきっかけに、福祉施設のスタッフや入所者、ご家族に労働組合の活動を知ってもらえるようになりました。さらには、地方協議会や労連のつながりが強まる効果もあったと認識しています。ゆにふぁんマップに福祉施設の写真や紹介文を記載することで、支援先にも大変喜んでいただいています。

自動車総連としても、他産別が取り組む活動を知ることができ、良い気づきを得ています。また、寄贈活動の資金は組合員からのカンパ金ですので、組合員に対してゆにふぁんマップを通じてカンパ金の使途などを明確に伝えることもでき、自動車総連の取り組みについて広く伝えるツールとして活用しています。これからも積極的にゆにふぁんマップに掲載していきたいと思います。

▲福祉施設からの感謝のメッセージ

※ 2021 年７月 20 日インタビュー

事例紹介 02：連合北海道

コロナ禍の取り組みと ゆにふぁんの活用

連合北海道　道民運動局長
皆川洋仁

コロナで苦境に直面する 人々や産業を幅広く支援

コロナ禍での連合北海道のゆにふぁん「支え合い・助け合い運動」の一部をご紹介します。

１つめは「マスクの寄贈」です。

新型コロナウイルス感染症により 2020 年 4 月から配布された政府マスクですが、「必要ない」という声があった一方で、「子ども用のマスクが欲しい」「マスクが手に入らない」と、マスクを必要としている方もいらっしゃいました。そこで全道 13 カ所の地協に郵便ポスト大のマスクポストを、地区連合には段ボール大のマスクボックスを設置しました。連合組合員はじめ、広く道民に呼びかけ、市販マスクも含め合計約 13 万枚を寄付していただき、子ども食堂や高齢者施設を通じ寄贈しました。

▲約13万枚のマスクを寄贈

２つめが、「“ 誰ひとり取り残さない活動 ” への支援」です。

札幌市内で若年女性や DV 被害者、性暴力被害者など、女性を支援する 13 の団体がつくる「クラウディ」では、新型コロナで収入がなくなったり、居場所をなくした女性を対象に、食料品、生活用品を配布し、悩みの解決に向けた活動をしています。

連合北海道の労働相談にも、非正規やあいまいな雇用で働く女性、すすきのなどの飲食店で働く女性からの深刻な相談が増えたこともあり、UA ゼンセン北海道支部の協力を受け、クラウディが希望する生理用品を 200 個寄贈しました。

▲女性を支援する団体への物品寄贈

３つめは、「道産米消費拡大とコロナ禍の子ども・学生への道産米寄贈」です。

コロナ禍による外食需要減少の影響を受けた道産米の消費拡大と、北海道の基幹産業である農業の支援、さらに食糧自給率向上の啓発を目的に、道産米を安価で斡旋する米消費拡大プロジェクトを行いました。

さらに、購入金額の 5％を支援金として寄付していただき、道産米を購入。貧困や孤食をサポートする子ども食堂と、アルバイトや仕送りの減少で日々の食事に困窮する学生を支援するために、「こども食堂北海道ネットワーク」と道生協連を通じて大学生協へ、約 3 トン、約 150 万円の道産米を寄贈しました。

最後は「ほっかいどう若者応援プロジェクト」です。

コロナ禍で生活苦に陥り、大学の退学を考えている学生も少なくありません。そこで、連合北海道、北海道労福協、道生協連、大学生協事業連合が中心となり、2021 年 1 月にプロジェクトを立ち上げ、食糧配布の支援を行いました。124 の企業・団体、133 の個人、234 の労組、また関連団体から 3,100 万円を超える寄付金をいただき、お米や缶詰、レトルト食品、カップ麺など一人 2,500 円相当の食料を、24 の大学･短大、約 8,500 人の学生に配布しました。

▲コロナで困窮する学生への食糧配布支援

メディアに取り上げられ 道内での運動拡大の契機に

「マスクの寄贈」は、報道でも大きく取り上げられ、300 枚ほど入る寄付ポストがすぐにいっぱいになり、土･日曜日は 1 日に 4 度のローテーションを組んで回収するほどでした。大変でしたが、マスクとともに入っていた「お疲れさまです」「ありがとう」「役立ててください」といったメッセージには感激しました。

「ほっかいどう若者応援プロジェクト」も、テレビや新聞の報道を見た大学 OB 会や、地域の NPO などが独自の食糧配布を行うなど、支援運動が広がる契機となりました。

▲マスクとともに寄せられたメッセージ

支え合い・助け合い運動は 労働組合の原点

歴史的に見れば「労働組合」は、まず支え合い・助け合い運動から始まり、次に人としての人権を求め、そして、賃金や労働条件の向上を勝ち取る団体交渉や春闘へと発展してきました。ナショナルセンターの連合が労働組合の原点である、「支え合い・助け合い運動」をピックアップし、ゆにふぁんを立ち上げたことは、労働運動の発展につながると思います。ゆにふぁんを通じて、「社会運動も労働運動も連合だよね」「連合っていいね」という声が増えていくことを期待しています。

ユニオンとオニオンの語源は「集まること」「集うこと」。それが「団結」であり、そこから連合のキャラクター「ユニオニオン」が生まれたと聞いています。団結のエネルギーは地域でも職場でも、支え合い・助け合うことから強まると思います。

※ 2021 年 7 月 26 日インタビュー

事例紹介 03：公益社団法人 ユニバーサル志縁センター

ゆにファンディングにチャレンジ ～若者おうえん基金～

公益社団法人 ユニバーサル志縁センター専務理事
池本修悟

若者を支援する人たちを基金助成で支援

みなさん、「社会的擁護」をご存知でしょうか。何らかの理由で家族と一緒に生活できず、18 歳、もしくは 22 歳まで児童養護施設や里親などと暮らす若者が、日本に 4 万 6,000 人くらいいるといわれています。

▲コロナの影響で若者に食糧や日用品を送る支援が増加

家族や頼れる人がいない若者は、ちょっとつまずいてしまうと通っていた大学を中退してしまったり、住み込みで働いていたところを辞めて住む場所も失ってしまったり。その結果、男の子であればホームレスに、女の子であれば望まない形での働き方をするという若者が一定数います。

そうした若者に寄り添い、自分たちの時間やお金を持ち出して伴走する自立援助ホームやアフターケア事業者があります。その方々の「本当ならこういうことができたらいいのに」という思いに応えるために立ち上げたのが、この「若者おうえん基金」です。

「若者おうえん基金」は、組合員のみなさん、一般の市民のみなさん、企業のみなさん、いろいろな方にカンパを募り、集まった基金をもとに、“ 伴走支援者の方々を支援する ” という形で活動を行っています。

2020 年 2 月にゆにファンディングにチャレンジしたところ、800 万円近くの資金を集めることができました。それを元手に、一団体につき上限 10 万円で「新型コロナ緊急助成」を用意しました。1 次公募では 48 団体に助成し、2 次公募では、赤い羽根共同募金やソフトバンクと連携して「チャリティースマイル　新型コロナ緊急助成」を展開、37 の団体に対し助成を行いました。

▲ゆにファンディングで800万円近い資金が集まった

新型コロナウイルス感染症の影響もあり、初期は消毒やマスクなど衛生面の物資不足に対する支援が多かったのですが、夏に近づくにつれ、働く現場の休業や時短によって収入が減ってしまった若者に対して、食糧や日用品などを送る支援が増えました。

ゆにファンディングで活動を全国に知ってもらう

もともと我々は、基金をつくることを目的に他のクラウドファンディングにチャレンジしていました。そんな時、READYFOR と連合のゆにふぁんがタイアップすると聞き、単に寄付を集めるだけでなく、「全国のみなさんに我々の活動を知ってもらいたい」「応援してもらいたい」という気持ちから、ゆにファンディングに参加しました。

連合のみなさんに寄付や、写真、メッセージなどいろいろな形で全面的に応援していただいたことでキャンペーン自体が盛り上がり、支援がどんどん広がっていくのを実感しました。

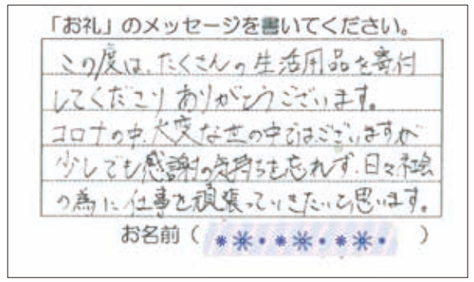
我々は、連合山口の「山焼き」の伝統を守るプロジェクトに続く、2 番目のゆにファンディングでしたが、連合山口のみなさんには大変応援していただきました。こうしたつながりの連鎖は「すごい」と思いましたし、我々も今後、知恵や思いなどをつなげていくことができるのではないかと思っています。

応援し合い、力を合わせてプロジェクトを続けてほしい

ゆにファンディングにチャレンジしようか悩んでいる方がいたら、遠慮せず、「自分たちの活動を知ってもらう」という思いで、自信を持って取り組んでいただきたいと思います。反応がなかったりすることもあるかもしれませんが、それは決して活動が悪いということではなく、タイミングや、たまたま響かなかっただけだと思いますので、くじけずに。くじけそうになったら私に声をかけてください。応援し合いましょう。

また READYFOR のみなさんに相談することも大事です。自分たちだけではなく、「チームでやっている」という意識で取り組んでみてください。プロジェクトとはみんなで助け合うことで続いていくものだと思いますので、力を合わせて進んでいきましょう。

ゆにふぁんマップには全国さまざまな活動に取り組んでいる仲間がいます。私たちも頑張りますので、みなさんも一緒に頑張りましょう。



▲支援団体から寄せられたお礼のメッセージ

※ 2021 年 7 月 20 日インタビュー

パネルディスカッション

パネルディスカッション
「想いをカタチにするために」

登壇者紹介

コーディネーター

中央大学法学部
教授
宮本 太郎（みやもと たろう）

東京都生まれ。1988 年中央大学大学院法学研究科博士課程修了。立命館大学法学部助教授、ストックホルム大学客員研究員、北海道大学法学部教授などを経て、2013 年より現職。政治学、福祉政治論専攻。政治学博士。

著書

貧困・介護・育児の政治

共生保障

生活保障

パネリスト

日本ファンドレイジング協会
代表理事
鵜尾 雅隆（うお まさたか）

2004 年、米国インディアナ大学 The Fundraising School 修了。課題解決先進国をめざし社会のお金の流れを変えるため、2009 年、日本ファンドレイジング協会を創設。GSG 社会インパクト投資タスクフォース日本諮問委員会副委員長、大学院大学至善館特任教授なども務める。

著書

寄付をしてみよう、と思ったら読む本

ファンドレイジングが社会を変える

寄付白書

パネリスト

リクルートワークス研究所
主任研究員
中村 天江（なかむら あきえ）

1999 年リクルート入社、2009 年ワークス研究所に異動。「働き方の未来」と「労働市場の高度化」をテーマに調査研究・政策提言を行う。商学博士（一橋大学）。2017 年より中央大学客員教授。同一労働同一賃金や東京一極集中など、政府委員も務める。

研究・調査レポート

「つながり」のキャリア論

個人のキャリアを豊かにする企業の社会貢献活動

マルチリレーション社会

パネリスト

日本労働組合総連合会
運動企画局局長
畠山 薫（はたけやま かおる）

2006 年電力総連女性委員会主査。主体的に活動する楽しさや切磋琢磨しながら達成させる喜びとやりがいを知る。2009 年「立場は人を育てる」と後押しされ、単組執行委員長就任。2011 年電力総連専従。2017 年連合入局、男女平等局長、2019 年より現職。

Ⅰ 基調提起

1．想いをカタチに ゆにふぁんで社会的課題の解決を 新たなるつながりを

中央大学
宮本太郎

【要旨】
実は大事なポイント
fund・fan・fun

ゆにふぁんが立ち上がり２年、改めて「ゆにふぁんとは何なのか」「当初のねらいがどこまで到達しているのか」、そして、「これからゆにふぁんはどう展望していけばいいのか、歩みを進めていけばいいのか」を考えていきたいと思います。

まず、「ゆにふぁんとは何か？」を復習したいと思います**（スライド１- ２）**。聞きようによっては少しダジャレのような話になりますが、実はとても大事なポイントだということを強調したいと思います。

ゆにふぁんとは、労働組合がファンディング、つまりお金を集めたり、お金を自ら社会的な活動につなげたりする形で新しい社会活動を切り拓いていこう、というのが１つめの定義です。

２つめは、労働組合は社会で人々の活動を安定させていく大事な役割を果たしていますが、それがなかなか見えてこないなかで、労働組合の特に地域における活動を見える化し、労働組合のファンをつくっていこうというものです。

３つめ、ユニオンという言葉の背景そのものが「つながっていく」ということで、これまでの職場でのつながりを、地域に押し広げていくということ。日本はわりとつながりが押し付けられがちな国ですが、職場のつながりも地域でのつながりも、実は楽しいことであり、これを能動的に選び取っていくことができると楽しいと実感する場でもあるということです。

つまりゆにふぁんとは、ファンド（fund）がファン（fan）をつくって、ファン（fun）、楽しいことである。言い換えると、新しく社会問題が起きるなかで、事態に対応して労働組合がこれまでの活動の中身を刷新していく、社会の問題と労働組合の新しい関係をつくっていくと同時に、それを見える化していく。それがゆにふぁんなのです。

社会問題、その解決法、
そして労働組合の新しい関係

まず、労働組合自体が時代の変化に対応していかなければならないということです**（スライド１- ３）**。今は人生 100 年時代。だいたい 20 年間は勉強をして、その次の 40 年間は働き、さらにその後の 40 年間がとても長かったりします。ここをどう充実させるかが問われています。

これまでの労働組合は、真ん中の 40 年間を主に自分たちの時間と考えてきましたが、そこに至るまでの学びを主にした期間、そして仕事を退職したあとの期間をいかに輝かせるかが、労働組合の課題として非常に重要になってきています。つまり、職場の連帯から地域での支え合いへと活動の射程を広げていくこと、言い換えると、組合の課題は雇用と賃金だけではなく、学ぶこと、つながること、生きがいをつくることに広がっているということです。

また、雇用が安定し、いわゆる標準世帯が「標準」とみなされるくらい広がっていたこれまでの時代は良かったのかもしれません。しかし、安定雇用と標準世帯が揺らいできた今、カバーできるはずだった女性や若者、子どもの問題が一気にクローズアップされてきました。ここにどう対応していくのか。さらに、これまでは社会の持続可能性が見通せていましたが、自然災害が頻発し、コロナ禍の想定外の事態が広がっていくなかで引き起こされる生活困難にいかに対処するのか。そして、「制度のはざまのニーズ」にいかに対応するかが非常に重要になっています。

こうした新しい社会問題にどう取り組むのか、いろいろな可能性が芽生えています。その一つが、新しいお金の流れです。

日本の場合、国や税金に対する信頼が低いため、老後のためにお金を貯めこんでいます。誰しも自分の老後に活かしたいのですが、他方でこのお金に意志を宿し、社

会のために役立てたいと思っている人もいます。これまではその方法がありませんでしたが、今まさに、ゆにふぁんやファンドレイジングによりその可能性が開かれています。

ネットの「つながる力」、ネットの「見せる力」も非常にはっきりしてきました。これを活かさない手はありません。さらには、これまで「国か企業か」という２分法だったのが、中間ゾーンに社会的企業 NPO や協同組合、あるいは何らかのミッションを掲げる株式会社が出てきています。ここをどう活用していくのかということです。

こんな風に、社会問題、その解決法、そして労働組合をめぐって新しい関係ができはじめています。これをいかに活かし、見せるかが問われています。ゆにふぁんは、まさにその舞台です。

２年間でゆにふぁんの意義が鮮明に

この２年間のうち１年間はコロナ禍でした（**スライド１- ４**）。結果的に、ゆにふぁんの考えたこれからの支え合いのかたち、連帯の未来像が、かなり不幸なかたちでしたが実証されてきました。先ほど新しい社会問題の話をしましたが、コロナ禍というのは既存制度の支援が届かない人たち、特に女性、若者、子どもが抱えている困難を照らし出すと同時に増幅させてしまったところがあると思います。ギリギリの条件でケアに関わっているエッセンシャルワーカーの人たち、その役割も明確に示したと思います。さらに、ここに自然災害が重なるとどうなるのか、という危機感も広がります。

解決法についても、この２年間でゆにふぁんの見通しが大きく当たってきました。デジタルネットワークの「つながる力」、「見せる力」を多くの人たちが格段にリアルに感じられるようになりました。よく、ソーシャルディスタンスと言われますが、フィジカルな距離はとらなければいけませんが、社会的につながっていくことは実は大事で、そのためのツールとしてネットワークがどれだけの力を発揮するかが見えてきました。

新しいお金の流れという点でも、特別定額給付金があり、それをフルに使わなければならない人たちもいましたが、一方で当面は余裕があり、そのお金に意志を持たせたいという人もたくさんいたわけです。そのとき、ゆにふぁんが大いに役に立ったであろうと思っています。

さらに労働組合という視点で見るならば、多くの人がテレワーク、リモートワークで地域に根付いて働く、ということになりました。そのなかで、会社の一員である自分と同時に、地域のなかの自分であることを多くの人が改めて自覚しました。また、ステイホームと言われ、介護の「通いの場」が縮小されたり保育所の登園時間が短縮されると、エッセンシャルワーカーが自分たちを支えてくれていることも見えてきました。そういう意味では、労働組合が地域とのつながりや、職場を超えた支え合いを構築していく大切さが見えてきた。そういう２年間だったと思いますし、大きな変化、見通した通りの変化のなかで、ゆにふぁんは着実にニーズに応えてきたと思います。それは、前述の３つの事例紹介を振り返るだけでも言えることです。

いずれも新しい社会的困難と、それを解決するツールを独自の創造的なかたちで連結させている事例であり、ゆにふぁんの進捗ぶりを示していると思います。（**スライド１- ５**）。

社会保障・福祉の体制が機能不全に

これまで労働組合は、社会保障・福祉をして、雇用を安定させ、人々の生活を支えてほしいと、政府に対し具体的な提言を含めて働きかけてきました（**スライド１- ６**）。それは依然として非常に重要なことです。しかし、これが必ずしもうまくいっていないということから目を背けてはいけないのです。今、日本は OECD 先進国のなかで断トツで高齢化第１位、国の借金も第１位です。しかし租税負担率を見ると OECD の下から５番めです。実は税金がきちんと集められておらず、社会に還元できていない。だからこそ、税金が重く感じてしまう。なぜならば、返ってこず取られているだけと感じるためです。当然負担を重く感じれば余計に集めにくくなります。その結果、給付水準は抑制され、さらに制度の狭間にいる人たちが増えるなか、納税者のニーズともかけ離れているため、余計に払いたくないということになるのです。

本来、社会を支えていかなければならないこうしたお金の循環が、今、途中で止まっています。また、その前提となっていた人々の生活のかたちも変わってきています。標準世帯というのは、もう標準ではありません。また、雇用の不安化もこれまでの仕組みの前提条件をひっくり返しています。では、こうした仕組みは放棄し、税金や社会保険料を集めるのもやめて、ファンディングや寄付に頼ればいいのか、ボランティアの活動に依拠すればいいのか。そうではないと思います。

これまでの公共を置き換えるのでなく、よみがえらせる

実は、ゆにふぁんを代表とする新しい公共空間、新しい問題に対する新しいアプローチというのは、きちんと税金や保険料を集め、しっかりと人々のニーズに合わせて配りきるという、これまでの公共のかたちを補完し、そこにエネルギーを充当していくためにこそ役立っていかなければなりません（**スライド１- ７**）。もう政府があてにできないから、自分たちでやっていきましょう、という置き換えではありません。これまでの公共を刷新するためにこそ、活かされなければならないと思います。

一つはファンディングや寄付。お金に意志を宿していくということです。税金や保険料とは、自分が出しているお金が誰を助けているのかわからないですし、その匿名性が大事なところです。これに対して、ファンディングや寄付はもっとパーソナルであっていいと思います。具体的に支えられた人の笑顔が見えてくることで、お金を出した人が、充実感と「社会的連帯って大事だよね」という実感を持てるということ。さらに、その実感に基づいて自分自身も参加をしていく、さらにはいろいろなメッセージを発信していくことです。それを通して、行政がこれまで提供してきた画一的なサービスではない、新しい多様な生活のかたちやニーズに見合ったパーソナルで当事者本位のいろいろな支援が実現すると同時に、つながりが広がっていくのです。そして何よりも、信頼や連帯感が芽生えます。「そうか、支え合いってこんなにも手応えがあるもので、かつ、自分もこんなに支えられるのだ」ということを、みんながわかっていくこと。その経験がこれまでの公共をよみがえらせることになります。さらに、新しい公共に対する国の補助金を獲得していくことも大事です。ゆにふぁんの２年間を振り返り、その原点を踏まえて到達を考えるとこのようになると思います。

２．寄付と社会参加 今、寄付について知っているといいかもしれない３つのこと

日本ファンドレイジング協会
鵜尾雅隆

【要旨】ファンドレイザーを育てる・寄付する側を育てる・遺贈寄付

最初に、ファンドレイジング協会が何をやっているのかというと、非営利団体が活動資金を集めることをファンドレイジングと呼び、その担当者をファンドレイザーと呼びます。協会では、認定ファンドレイザーという資格制度を設け、今 1,400 名の方が資格をもって全国で活躍されています。（**スライド２- ２**）あるいは、そういった方たちが集まり、寄付や課題解決向けのお金の最先端の事例を共有するアジア最大のカンファレンスを年に１度、開催しています。毎年 1,500 ～ 1,600 人の方が参加されます。

また最近では、寄付をする側として、子どもたちに向けた活動も行っています。みなさんのなかに、自分は子どもの頃に寄付教育を受けたという方はどのくらいいらっしゃいますか？　我々の調査だと５％くらいしかいらっしゃらないです。「寄付ってよくわからないよね」というまま大人になっている方がたくさんいらっしゃるなかで、１万人を超える子どもたちにワクワクしながら寄付を原体験できるプログラムを全国で提供しています。

同時に、遺贈寄付が今、急速に伸びており、全国的な

ネットワークで中立的な相談の仕組みをつくっています。毎年、1,000 名を超える方達が相談にきます。そこで寄付を紹介していく取り組みをしています。こういった活動を十数年間してきたなかで、感じることを３つお話ししたいと思います。

寄付

１つめは、「寄付」です**（スライド 2- 3）**。みなさん、寄付についてどう思いますか？　私は、この字がすごく好きです。似たような言葉で、喜ぶに捨てると書いて「喜捨（きしゃ）」があります。日本では寄付のことを喜捨のように捉えている方が多くいると思います。募金箱にチャリンと入れたらあとの使い道は知らない。この「寄付」という字は、寄り添って付き添うと書きます。これが日本における寄付の本質になりつつあると思います。

つまりどういうことか。現場の方たちに単にお金を提供するだけでなく、その人たちに共感をして、それをきっかけに関わっていったり、寄付した人たちがつながっていったり、つながりが生まれるということです。もう一つは、寄り添って付き添うという寄付を自分の人生として楽しむ人も増えてきていると思います。さらには、寄付でも、ファンドレイジングでも、誰かを応援する人は応援されるという構造があると思います。寄付の非常に大きな本質だと思います。

日本の寄付文化

２つめは、日本において寄付は伸びているのか。私は神戸出身ですが、神戸の震災の際、130 万人のボランティアが出てボランティア元年と呼ばれました。これは一過性だと言われましたが、その後、ボランティアは定着しました。では、寄付はどうなのか。我々は「寄付白書」**（スライド 2 - 4）**を出しています。2009 年、2010 年は、

１年に１回寄付をされている方が 33 ～ 34%、３人に１人くらい。東日本大震災があったときには、68.4％の方が寄付をされました。このときも一過性ではないかという声がありましたが、そのあと何度調査しても、45％前後の方が１年に１回は寄付をしているという変化が起きています。これが日本の一つのトレンドかと思います。

２つの課題と可能性

そのなかで、あげられる課題と可能性があります**（スライド 2 - 5）**。人生の集大成の社会貢献として寄付に関心をもっている方が増えてきていることが、非常に大きな可能性だと思っています。年間の相続額というのは、日本では 40 ～ 50 兆円あると言われています。そのなかで、21％くらいのシニアの方は、資産の一部を遺贈寄付してもいいとおっしゃっています。ただし、実際にされている方は、0.01％もいらっしゃらないのが現状です。

そして、子どもたちが楽しみながら寄付を体験する「寄付教育」の原体験も、今は機会が非常に限られていることが課題であり、逆を言えば可能性でもあります。ちなみに、我々が子どもの教育に関わるなかで感じている一つの大きな課題は、日本において「自分が社会に参加したら社会現象を変えられるかもしれない」と思っている子どもの比率が先進国のなかで非常に低いことです**（スライド 2 - 6）**。これは、子どもたちに課題があるという以上に、大人自身が自分たちで社会参加を通じて社会現象を変えられると思っていないところが、一番の課題だと思っています。こうしたところを変えていきたいと思います。

共感

そして３つめは、共感性という言葉が持つ意味です**（スライド 2 - 7）**。私は、寄付に関わるなかで「共感性」が非常に大事になってきていると思います。人生 100 年時代で生き方が変わっていくことをテーマに、リンダ・グラットン教授が書いた『ライフ・シフト』という本があります。AI が出てきてロボットの役割が増えていくなかで、人間が AI に負けない力として「共感力」をあげていました。特に日本社会では孤独が非常に大きな問題になっています。また、WHO（世界保健機関）が 2030 年世界最大の疾患として予言しているのは、うつです。ポリオでもコレラでもありません。うつになり孤独になる社会でどうやって、共感性というものを自分たちが活かしながらつながりをつくり、幸せになるのか。まさに雇用と賃金以外に人が幸せになる環境をどうやってつくっていくのか、非常に重要になると思います。

３．社員ボランティアは個人・企業・社会の「三方良し」

リクルートワークス研究所
中村天江

【要旨】第三のつながりを

リクルートワークス研究所が日本やアメリカ、フランスなどの５カ国で行った調査でも、「日本で働く人は孤独」ということが確認されました。人間関係が家族と職場に集中していて、第三の人とのつながりがありません。しかも、高齢化のなかで家族とのつながりもいつまでも続くとは期待できなくなっています。AI やグローバル化により、職場でのつながりも不安定になっています。家族とも職場とも異なる第三のつながりが、人生を幸せに生きるためにも、キャリアのリスクを乗り越えるためにも有効であることがわかりました。では、どうしたら人とのつながりをつくれるのか。これは忙しく働く人にとっては切実な問題です。

労働組合で活動されている方は、おそらく社交性が高く、誰がみても「この人、いろいろな人とどんどん知り合いになっていくよね」という人が、特に幹部の方には多いと思います。でも、普通の会社員には、人見知りだったり、知らない環境に飛び出すのは勇気がいる人もいます。「内向的な人が人とのつながりをつくるにはどうすればいいか」を分析してわかったのは、飲み会やバーベキューパーティーなどに行くよりも、実は共通の目的があるところで活動することが、人間関係をつくるのにとても有効であるということです。

では、共通の目的とは何か。たとえばボランティアは第三のつながりを見つけるのに役立ちます**（スライド３- 1）**。

不確実な環境変化を乗り越えて、長い人生をご機嫌に生きていくときに、どういうことが大事か**（スライド３- 2）**。幸せにキャリアリスクを乗り越えるには、もう一つ重要なことがわかっています。

キャリアの未来を拓くボランティア

（スライド３- 3）実は、社会の役に立ちたい人というのは 30 年間で 20％も増えているのに、ボランティアしている人の割合は変わっていません。先ほど「寄付は 10％増えました」という話がありましたが、ボランティアは全然増えていない、岩盤状態が続いています。誰がやっていないのか見てみると、ボランティア経験をしていないのは、会社で働く人たちです。まさに労働組合の組合員の方たちの層が、潜在的には社会の役に立ちたいのだけれど、それができていないという現実があります。この人たちが社会課題に向き合うことは、きっと社会にとってもとても良いことです。

ボランティアとは、忙しい人に「やってみたらいいよ」と言えるものでしょうか**（スライド３- 4）**。実際、労組の活動も多分にボランティアみたいなところがあるため、ときどき「時間がなくて大変なんです」という話を聞くこともあります。ですが、「ボランティアって、結構いいんじゃないかな」というのが我々の研究所が調べた結果から言えることです。

まず一つ、人生 100 年のなかでいろいろな変化を乗り越えるときに、将来のキャリア展望がある人とない人を調べました。その結果、「キャリア展望が最もない」のが、「同じ部署の人としかつるまない人」。「キャリア展望が最もある」のが、「ボランティアやＮＰＯで活動したことがある人」でした。その意味で言えば「会社から解放せよ」というのは、この一点だけでも働く人にとっては可能性のあるメッセージだと思います。

自律的な選択

それからもう一つ（**スライド３- ５**）。環境変化を乗り越えていく、たとえば仕事がなくなるかもしれないというときに、自律的なキャリア形成が大事であると、ここ数年、言われています。自分で選ぶって、簡単なようですごく難しいですよね。たとえば、進学するときも就職するときも、「みんなそういうレールに乗っているから一緒に行った」という人も少なからずいるでしょう。人生を自分で選んでいくのは、思うほど簡単なことではありません。

けれども、ボランティアでは、好きな活動を自分で選べます。先ほどのような、生活が困窮している方のサポートをしたい人もいれば、今開催されているオリンピック・パラリンピックの大会などのイベントで、わいわい盛り上がりたい人たちもいて、さまざまな「Love」の活動も、「Labor」の活動も、学びの「Learning」や「Leisure」みたいな活動も、いろいろなボランティア活動のなかから自分で選べる。しかも、合わなかったらやめることができるし、自分で選び直すこともできます。そういう意味では、選択の幅が広く、関わり方が軽やかなことも、日本社会のなかでボランティアが大事な人生の選択肢になっている理由です。

イノベーション志向に

こうしたかたちで、社会貢献を潜在的にしたい人たちが社会で活躍してくれることは望ましい、という局面に今はありますが、もう一つ、企業で働く人達がボランティアをすることは、実は会社にとってもメリットがあると、ここ数年様々な研究でわかり始めています（**スライド３- ６**）。

たとえば、日本財団のボランティアサポートセンターと我々が一緒に行った分析では、ボランティア習慣がある人とボランティア習慣がない人では、コロナ禍という非常時において、行動や意識に差があります。ボランティア習慣がある人達は習慣がない人に比べて、「新しいことを試すイノベーションの志向がある」や「価値観や境遇の異なる人とも関係が築ける」、いわゆるダイバーシティ的な振る舞いができる、「コロナ禍のような非常時でもポジティブな機会を見出せる」といった項目のスコアが高いのです。

さらに、寄付も、ボランティア習慣がない人は９%ですが、習慣のある方々は23%近くいます。ボランティア習慣がある方々は、社会性が高くかつイノベーティブでダイバーシティなセンスがあって、レジリエンスが高い、今企業が求める最もほしい人材です。そういう意味では、ボランティアをしたい人たちを会社のなかに閉じ込めておくよりも、仕事に余力があるのであれば、その人たちを社外に解放するのは、企業にとってもメリットがあるのです。

社外活動が本業に活きる

実際、管理職に「社外活動が本業に活きるか」を尋ねた調査があります（**スライド３- ７**）。これはボランティアに限らず他の社外活動を含め、熱心にやっている・積極的にやっている人たちは、やったことがない人たちに比べて、20%も多く「本業に活かせる」と回答しています。

何が言いたいかというと、会社のなかに閉じ込めがちだった時代というのが少し前の日本的雇用にはありました。今は、働き方改革や期せずしてコロナ禍で、時間に融通が利くようになった人もいます。そのなかで、自己研鑽することもいいのですが、余った時間を普段とは違う、むしろ「誰かの助けになりたい」とか「誰かからありがとうと言われたい」など、鵜尾さんのお話にもありましたが、「ありがとう」によってつながりや人生の充実が生まれていくほうが、たった一人カリカリ勉強するより、はるかに日々の生活がイキイキするのです。その結果、会社にとってもさまざまなメリットが出てきているというのが、今の状況です。

「三方良し」の社員ボランティアをレガシーに

ボランティアは古くて新しいものです（**スライド３- ８**）。神戸の震災がボランティア元年と言われ、すでに30年が経ちますが、まだまだ広がっていません。特に企業で働く人の領域ではボランティアは十分に広がっていません。労組の方々とお付き合いがある方たちのなかに、本当はやりたいと思っていてできていない人たちが、まだたくさんいます。ボランティアは、社会にとってありがたい活動であり、やりたいと思っている個人を解放することでもあり、そこでの経験が、企業がESGやSDGsを推進し、未来的なことを取り組んでいく支えになります。今後、個人・企業・社会の「三方良し」のボランティアが、働く人たちのなかで広がり、取り組みが進んでいくことを願っています。

４．多様な社会運動に関する意識調査からゆにふぁん運動へつなぐ

日本労働組合総連合会
畠山薫

【要旨】ゆにふぁん発展のロードマップ

ゆにふぁんは２年が経ち、ゆにふぁんに関わっている人たちも今どういうところにいて、次に何をめざしたらいいのか見えてこないといったところがあると思います。ゆにふぁん発展に向けて、ロードマップを描いてみました（**スライド４- ２**）。ステップ１が現在地。「組織内・連携する諸団体の活動を見える化」をこの２年間で築いてきました。次は、「諸団体との連携・参加・参画につなげる」ステップ２の取り組みへと発展させたいと思います。このステップ１と２を定着させて、参加・参画を通じて共感・喜び・やりがいを感じる、労働組合と地域、市民とつながって主体的に社会課題解決への行動につながっていくステップ３に導くのが、ゆにふぁん運動です。

参加経験と参加意向のギャップ

実現に向けての足掛かりの一つとして連合が行いましたネット調査、「多様な社会運動と労働組合に関する意識調査2021」の結果です（**スライド４- ３**）。社会運動を「社会の問題の解決や、社会の制度や仕組みなどの改善を目的として行われる運動」と定義し、９つの運動に区分をして調査をしました。

「社会を良くするために社会運動は必要だと思うか」という問いかけに45.4%が「必要」と回答（**スライド４- ４**）。「労働組合は必要だと思うか」は54.0%が「必要」と回答しました。どちらも10代・60代の回答が他の年代よりも多かったです。一方、参加経験で見れば、労働組合の活動の経験は少なく、社会運動の経験においても少ないです（**スライド４- ５**）。しかし、「参加したい」という意向は特に10代と60代が高く、参加経験と意向に大きなギャップがあることがわかりました。

注目すべきは「参加したい」をつなげる

注目すべきは、「参加したい」をどうつなげていくかです（**スライド４- ６**）。「参加したい」が最も高くでたのが、金品支援型やクラウドファンディング型や自筆・ネット署名型です。加えて、これらを社会運動と捉えていることに、注目をしたいと思います。

また、社会運動のイメージについても調査しました（**スライド４- ７**）。「自筆・ネット署名型」や「金品支援型」は、「市民の声を代弁している」「社会や世論を変えるのに有効である」とイメージする人が多く、「クラウドファンディング型」はコロナ禍で身近に感じるようになり、今後参加する人たちが増える可能性が高いことがみてとれます。

こうした自身の考えはどこから影響を受けやすいのか（**スライド４- ８**）。媒体であれば「テレビ」「ネットニュース」「SNS」、人間関係であれば「家族・パートナー」「友人・知人」「学校・勤務先」など、年代によっても違いがあることを押さえておきたいと思います。

調査結果からの示唆

これらの結果から２つのことが示唆されます（**スライ**

ド４- ９）。一つは、「参加意向と参加経験のギャップを埋め、参加・参画・支援の拡大につなげる」。参加の機会と場づくりは、組織内や地域内に留まることなく広く、そして、気軽さ、楽しさ、効果的な手法も取り入れていく。もう一つは、「参加を通じて当事者意識の醸成と社会課題解決への行動につなげる」。社会課題解決につなげる行動を、ゆにふぁんを活用して発信、募集をする。その結果を可視化・共有化することで、当事者意識の醸成につながるのではないかと示唆します。

取り組みの深化に向けて

ゆにふぁんマップに掲載されている活動を例にとると**（スライド 4-10）**、今は、マップで活動をお知らせすることで留まっている状況です。マップから広く参加募集ができる機能があり、これを活用し、「参加したい」をつなげるためには、今回の調査結果を参考にすれば、世代や媒体や影響を受けやすいところをうまく活用して、参加につなげてくことができます。

また、結果の可視化という点では、たとえば、ゆにふぁんのマップには参加人数や活動報告、開催告知などが掲載できるようになっています。参加した人たち、これから参加しようと思っている人たちに結果を見せ、それによって「地域とつながっている」「社会を変えられるかもしれない」という実感につなげていくものとして活用する。こうした取り組みを今後さらに進めていくことで、ゆにふぁんの活動は深化していくと思います。人とのつながり、また地域とのつながり、支え合い助け合いのすべての結節点はゆにふぁんであると捉えています**（スライド 4 -11）**。

コーディネーターコメント／宮本太郎

鵜尾さんは寄付という観点からお話いただき、お金に意志を宿らせる大事さ、ファンドレイザーという、支えている人たちの役割があるということがよくわかりました。中村さんがお話された「三方良し」は、実はビジネスのためにもいい、ということを忘れないでおきたいと思います。畠山さんからは社会運動という観点から、ゆにふぁんが現在どこまで達成しているのかお話いただきました。さらに、お金・物品、参加の機会を創出する点で、まだ足が踏み出しきれていないところがあることを調査データに基づいて観察されているのは、すごく大事な点だと思いました。

Ⅱ 討論

テーマ「寄付とボランティアの現状と課題」「ゆにふぁんについて評価、期待、課題」

なぜ、10 代、60 代が社会課題に興味があるのか

畠山：10 代と 60 代の社会参加の意向が強いというデータを示しましたが、なぜ、10 代の人たちが社会課題に興味や関心があるのかについてお聞きしたいと思っています。

鵜尾：「最近の若者は」というのは 2000 年前からあるらしいのです。これは昔、ある方が言っていたのですが、「若い人というのは、いつも社会がハングリーなものに対してハングリーである」と。たとえば、日本中が白物家電や自動車とか三種の神器をほしいと思った高度成長期の時代は、「それをつくりたい」という欲求が若い人たちに起こりました。

今、これだけ財政赤字で高齢化しているなかで、社会がハングリーなのは、「なにか新しい社会問題の解決策を考えていかなきゃいけない」ということであり、社会がそれに対して要求が強いので、若い人たちはそこを敏感に感じてハングリーになりやすいという傾向があるのではないでしょうか。この傾向はとまらなくて、これからも加速化していくのではないかと思っています。

一方、シニアの方ですが、慶應義塾大学の前野先生が中心に研究されている「人間がどうしたら幸せになれるのか」という『幸福学』という分野があります。そのなかで、人間が幸福になるには４つの因子があるとしています。①やりたいことがあるということ　②つながりと感謝の関係があるということ　③ありのままでいいということ　④なるようになるということです。「やりたいことがあるということ」と「つながりと感謝の関係があるということ」、この２つの構造が人間の幸せに非常に大きな影響を与えるとしたときに、まさにゆにふぁんのような場で、人と関わったり、行動をすることでつながりや感謝の関係ができ、やってみようと思うことをできること自体が幸せにつながっている、という感覚を持つ方が多くなっているのではないかと思います。

会社の中でボランティアをどう進めるか

畠山：中村さんの「社員ボランティア」というお話では、企業によってはボランティア休暇を設けている会社もありますが、社会貢献活動をするために「会社を休みます」というのが、なかなかできないなかで、どうやってボランティアに行く人を、みんなで送り出せるかという点をお聞きしたいと思います。

中村：10 代の方は社会運動に参加意欲が高く、「経験したい」と回答し、20 代・30 代になると意欲が落ちていく、という連合で行った調査がありますが、私がある大企業で行った調査でも同じでした。内定者の段階では「労組の活動に積極的に参加したい」と回答しているのに、入社した後の 20 代・30 代の社員になるとそのスコアが 20 ～ 30％落ちていきます。社会課題に向き合いたい、労働組合の連帯の活動って素晴らしいと理念で思っている段階と、実行できるかという点で、働き始めた後にギャップがあるのが今の日本の状況です。

一方で大企業をみると、制度は充実していて、様々な制度もあり、法律が変わったこともあって休暇もどんどん取るように言い始めているのに、なお変わらない。話を聞くと、本社が整備している人事制度と職場でそれを適用できる風土があるかという点に大きなギャップがあります。

先ほど「管理職の人たちが自分も社会活動をしていると、それが本業に活きる」と回答した例にもあるように、ボランティアやゆにふぁんのような活動は、飛び込んでみると「こんなにおもしろい活動があるのか」と感じるものです。しかし、外から見ている限りにおいては、まったく価値がわからない。積極派と消極派の分断が、経験によってしか超えられないように思います。

そういった意味では、「ボスボラ」、まずは上司の人や会社の役員の人たちにボランティアをやってほしいということです。実際、社員のボランティア参加率が高いいくつかの企業では、「役員の人たちがみんなやっています」といった話が出てきます。職場の風土を変えていくときに、「管理職の人たちこそ会社の外に飛び出してね」というのが、近況から見る世界だと思います。

宮本：これはやはり、トップからボトムからみんなで、そういう経験が会社の業績にもプラスだということを共

有することが大事なのだと思います。職場でそうした雰囲気を広げていくヒント、突破していくヒントがあればと思います。中村さんいかがでしょうか。

中村：たとえば、トヨタ自動車は社員のボランティア参加率が高いのですが、それは経営からメッセージが出ていて、人事もキャンペーンを行うなど会社が一丸となって、「そうしたことに取り組むのが望ましい企業人の在り方ですよ」とメッセージしています。さすがにそこまでくると、特定の部署の上司の考えに左右されず、「会社からそういう在り方が望ましいとされているので、やりましょう」といった話がスムーズに通ります。

一方で経営からのメッセージがないと、どうしても職場に閉じてしまうため、上司からすれば業績責任などがあるなかで、「他のことまで面倒を見てられません」みたいなことが本音としてあります。

風土をつくるために、会社として何をやるのかまで踏み込んでいる会社は、やはり参加率が高いという傾向があることがわかっています。

ゆにふぁんで良かったこと

鵜尾：畠山さんのお話は調査も含めておもしろかったです。私は、ゆにふぁんの取り組み自体を非常におもしろいと思って伺っていました。この２年間の活動のなかで、どういう切り口からでもいいので、畠山さんの目線から見て、「一番やっておいて良かったな」「こういうことが起こって嬉しかった」ということを教えてください。

畠山：ゆにふぁんが立ち上がったときに、クラウドファンディングを連合として、労働組合として初めて実施することになったのですが、このコロナ禍で、クラウドファンディンができる仕組みをつくって本当に良かったと思っています。

最初にゆにふぁんを担当したとき、「寄付をお願いします。このプロジェクトをお願いします」といろいろなところで言ってきたのですが、クラウドファンディングというものがなかなか伝わらず、単なるお金集め、資金集めのように思われていたように思います。また、自分自身もよくわかっていない部分があったと思います。

特に、「若者おうえん基金」で、コロナ禍でピタッと寄付が止まってしまい、どうしようかと思ったとき、目の前で困っている人たちと伴走している人たち、支援団体を応援する、というところにこのクラウドファンディングの大きな価値があるのだなと。お金・資金を集めるツールではなく、若者おうえん基金を通じてプロジェクトに寄付することで一緒に参加しているという気持ちになる。自分が一緒に伴走することはできないのですが、その手助けになる。その一歩がクラウドファンディングによって踏み出せたなという実感があったことが、とても嬉しかったと思っています。

クラウドファンディングをやってみようと思いながらも、一歩前に踏み出せない人も多いと思います。そこには、目標額をハードルに感じてしまうところがあるのだと思います。どういう活動を、どれだけの人と共感し、一緒に感じ合うか。その見せ方で今の時代、これからの時代に社会保障ができないところを埋めていく。労働組合としては、そういった一つの大きな機会があって良かったなと思いました。

ボランティアを導入して良かった事例

鵜尾：中村さんのお話にあった「ボスボラ」というのは、その通りだと思いました。昔は、飲ミニケーションというのが職場にはありましたが、ボラティケーションというか、みんなで植林をしたり、ボランティア活動を一緒にやって一体感がでるといったことが、いろいろな職場で起こっていると思います。

私がアメリカにいたとき、職場で寄付を集めて「○○に支援します」という職域募金をしている企業と、していない企業で、している企業は従業員の会社へのロイヤリティ、忠誠心が平均値で何十％か高いという、ある大学の調査がありました。先ほどの日本財団のボランティアサポートセンターさんとの合同調査もまさにそうだと思いましたが、日本でもエビデンスとして何か出ているとか、「ボランティアを導入したらこんないいことがありました」という象徴的な事例があるといいなと思いながら聞いていました。そういった事例などはありますか。

中村：企業のなかでボランティアをどう広げていくかというときに、「ESG 経営」が課題として上がってきたタイミングが追い風だと思っています。日本財団のボランティアサポートセンターと行った調査でも、ボランティアをする社員というのは、ESG 人材として適性が高そうだと出ています。たとえば、NEC さんは自社でボランティア支援をするためのサービスをつくってもっていますが、ボランティアをする社員にどういった傾向があるかデータを見せていただいたときも、ESG 人材であるという結果が出ていました。

そういう意味で言うと、ESG 的なことを推進していくときに、どういう人材をどの部署に配属させるか。サスティナビリティ推進室みたいなところで活躍する人が出てくると、キャリアとしても本人がやりたいこととマッチしていて、より循環していくのだろうと思います。ソーシャルな人材の、企業での活かし方というところまで踏み込めるといいと思っています。

またそれを目標に、オリンピック・パラリンピックのスポンサー企業でボランティアをされる方を対象に大会前とコロナ期の中間調査をしていて、大会後もやる予定です。コロナの影響でオリパラのボランティアの経験の質がかなり変わってしまうためどこまで言い切れるのかわかりませんが、エビデンス自体もつくり、様々な企業に対応したいと思い取り組んでいます。

日本の寄付のブレイクスルーは？

中村：鵜尾さんがお話された、「お金の巡りが社会を変える、寄付でその巡りを変えにいっている」というのは、画期的な取り組みだと思っています。一方で、ボランティアをする社員に対する調査でわかったのは、業績などが悪化して先立つものが乏しくなると、寄付やボランティアの意欲が下がってしまうことです。どういう人達のお金が、ファンディングなどに回っていくと、現在45％前後という数字が、さらに 50％、60％と増えていくと思いますか？　また、ファンディング文化を日本に広げていくときのブレイクスルーポイントはどこでしょうか。

鵜尾：日本において寄付は、個人から年間で 7,000 億円くらいあると言われています。アメリカがだいたい 30 ～ 50 兆円くらい個人寄付があると言われています。50 倍くらい差があるなかで、まだまだのびしろがあると思っています。

どこがブレイクスルーになるのかというお話ですが、規模の話として考えるか、寄付というものの広がりをどう捉えるかの２つの視点があります。規模の話からすると、遺贈寄付というのは、老後にどれくらいお金が必要か心配な人がいるなかで、「人生の集大成に、子どもに残しつつも一部は社会貢献をしてもいいかな」「そもそも子どもがいないので社会貢献をしたい」という人が多くいます。そこは重要なポイントだと思っています。また、世界各国との違いで言いますと、富裕層の方が社会貢献をしやすい仕組みが制度面も含めて違いがあるため、そこは残されている課題です。ですが、「経営者・富裕層が社会貢献します」「遺贈寄付します」というのも、実はより多くの個人が寄付について前向きな感情をもっている社会環境がないと、そもそも動かないと世界中で言われています。これは企業の社会貢献も同様です。

一人ひとりの個人が寄付をして、それが自分の幸せとつながっている感じ、先ほどのつながりと感謝や、やりたいことにつながるとか、みんなが仲間になっている、などが身近になっていき、「自分がやってよかったな」という感情を持っている方が日本社会で 51％を超えたときに、日本での寄付はブレイクスルーします。そうすると、遺贈寄付も進むし、経営者や富裕層ももっと社会貢献しようと思うことができるのだろうと思っています。これはもうムーブメントだと思っています。そういう意味では、ゆにふぁんのやっている小さなコミュニティをたくさんつくっていくという取り組みが寄付を進めるうえでは、一丁目一番地だと思っています。

ゆにふぁんの認知度を高めるためには？

中村：ゆにふぁんの活動を聞いたときはとても画期的だと感じました。ちょうど、某メディアと ESG に関するやり取りをしているときに資料をいただき、まさに労働組合が推進する在り方だと思いました。一方で、ゆにふぁんの活動が連合の外の人に知られているのかというと、まだまだだという印象を持っています。どうしたら、この取り組みが社会の人にもっと興味を持ってもらえると思いますか？　ゆにふぁんが広がっていくために、何があったらいいと思っているかをお聞きしたいです。

畠山：ゆにふぁんはマップでは、労働組合の活動と、労働組合とつながっている NPO・NGO の活動が掲載できる仕組みになっています。つながるという点では、そうした組織団体の人たちとつながっていくことができますし、また、参加をする側も、「労働組合に所属しています、企業に所属しています、参加していいですか？」と、どこかに許可を取るものではなく、「この活動に参加したい」という個人の意思で参加ができるのが、ゆにふぁんの特徴です。ですが、その辺りがまだ浸透していないことと、個人が参加できる活動の選択肢がまだ少ない点が課題です。今までの活動を紹介するという形で掲載件数は伸びていますが、これからは、労働組合のなかだけでの参加・募集・企画から、もっと外に広くメッセージを出し、「一緒に参加をしてみませんか」「一緒に企画をしてみませんか」、あるいは「ある一つの労働組合だけでやっていた活動を他の労働組合も一緒になってやって

いきましょう」など、そうしたつながりをつくっていく機会や場を創出できれば、より社会に広っていくのではないかと思います。

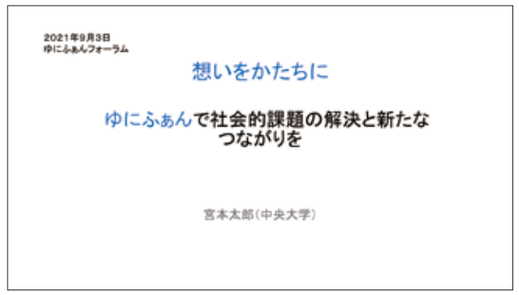
討論まとめ

宮本：白熱した議論となり、様々なことが見えてきたかと思います。ゆにふぁんのこれまでとこれから、畠山さんの最後の回答がいろいろなことを語っていたと思いますが、冒頭、ゆにふぁんという言葉について、「fund が、fan をつくり、fun つまりそのことをやりがいあることと感じる」ことの大切さをお話ししました。クラウドファンディングも広がり、各地の労働組合や地域協議会、地方連合会がいろいろな活動をしていることが見えてきたことも非常に大事だと思います。ただ、同時に労働組合のファンを集めるという点では道半ばである。いかにゆにふぁんを知ってもらうかというところから、もう一度考えていく必要もあるだろうと思います。その前提として、ファンドを職場のなか、あるいは職場を超えて楽しむ、つながりをつくる、それを享受するという点でも、まだまだのびしろが大きいと思っています。畠山さんの言葉で言うならば、ステップ１は到達しましたが、ステップ２、ステップ３はまだまだ、これからやるべきことがたくさん残されているという段階だと思います。

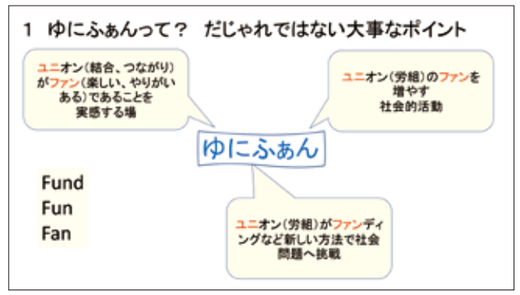
ゆにふぁんの２年間の活動を確認したことが一番大事なポイントだったと思います。改めてお三方には感謝の意を表したいと思います。

※ 2021 年８月３日実施

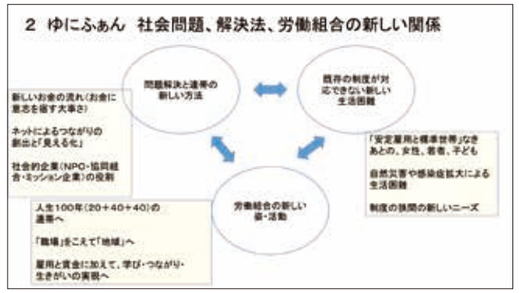
スライド 1-1



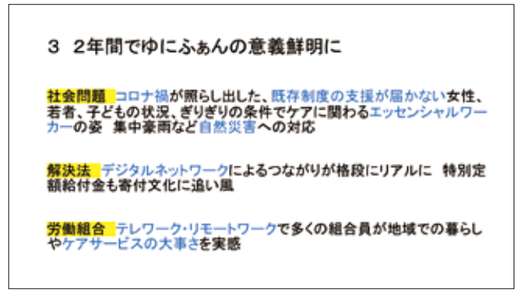
スライド 1-2



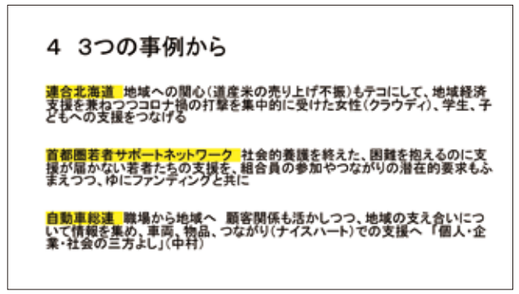
スライド 1-3



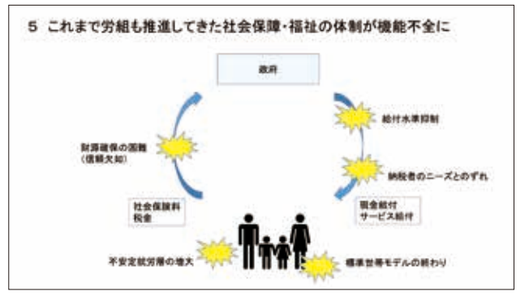
スライド 1-4



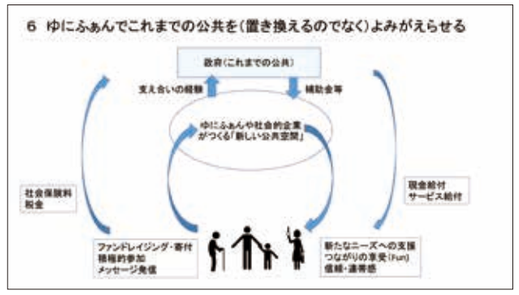
スライド 1-5



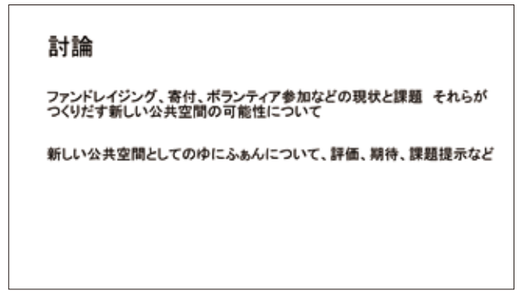
スライド 1-6



スライド 1-7



スライド 1-8

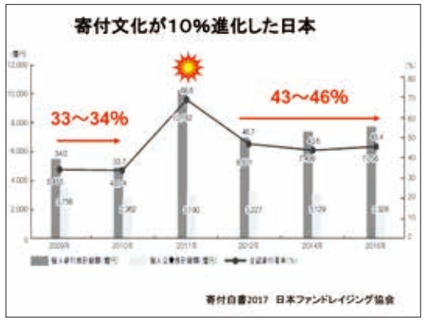


スライド 2-1

スライド 2-2

スライド 2-3

スライド 2-4



スライド 2-5

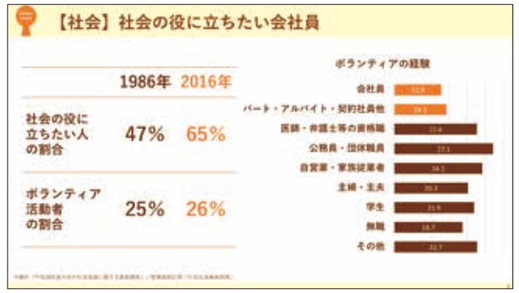
スライド 2-6

スライド 2-7

スライド 3-1

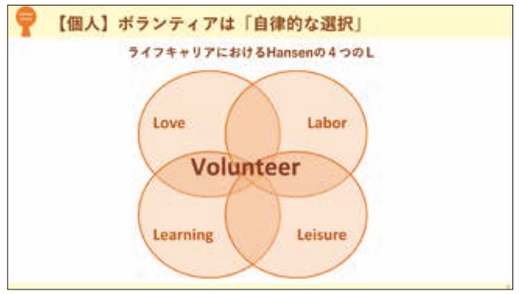
スライド 3-2

スライド 3-3

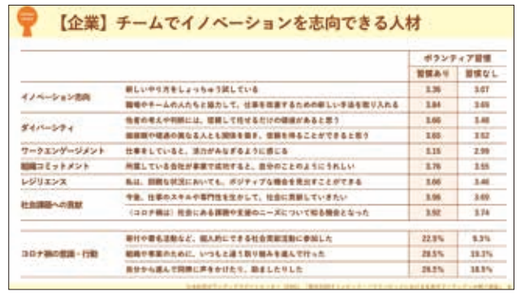


スライド 3-4

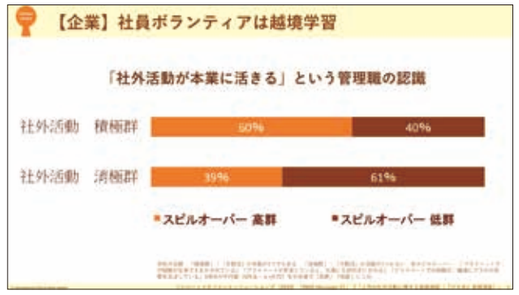
スライド 3-5



スライド 3-6



スライド 3-7



スライド 3-8

スライド 3-9

スライド 3-10

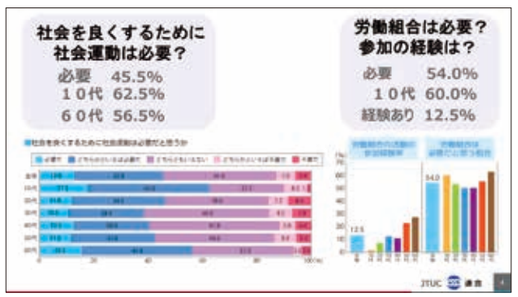
スライド 3-11

スライド 4-1

スライド 4-2

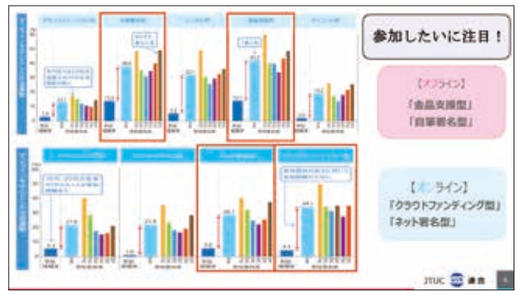
スライド 4-3

スライド 4-4

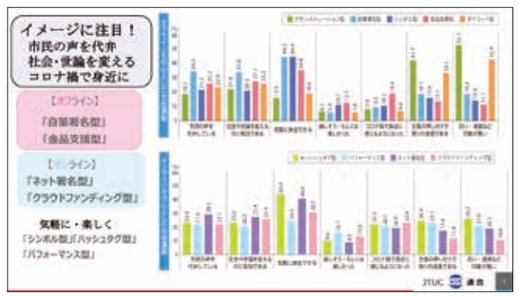


スライド 4-5

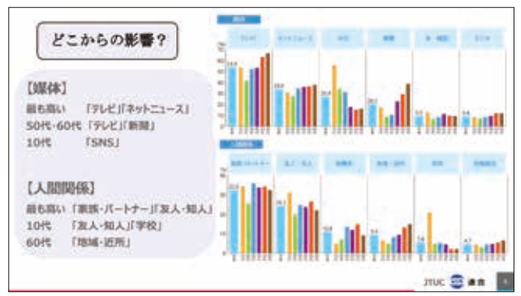
スライド 4-6



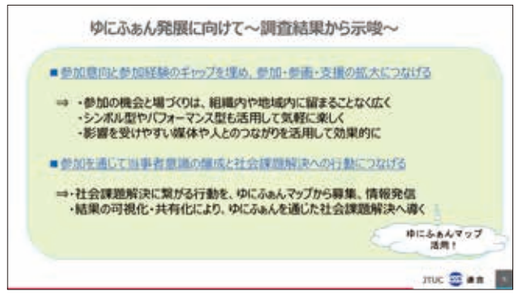
スライド 4-7



スライド 4-8



スライド 4-9



スライド 4-10

スライド 4-11

ゆにふぁん応援メッセージ

「ゆにふぁん」がスタートしてから２年。
「支え合い・助け合い運動」で活躍されるみなさまから、メッセージをいただきました。

２年間でゆにふぁんの意義が鮮明に

中央大学教授　**宮本太郎**

ゆにふぁんが立ち上がり２年、このうち１年間はコロナ禍で想定外の事態が広がりました。コロナ禍は、女性、若者、子ども、エッセンシャルワーカーをはじめ、厳しい状況下で働く人達の困難を照らし出すと同時に、私たちが常に大きな自然災害のリスクに晒されているという事実を突きつけました。想定外の事態でゆにふぁんの役割がさらに明確になったように思います。

既存の支援が届かない、制度のはざまにたたされている人たちのニーズにいかに対処するのか、こうした新しい社会問題にどう取り組むのか、NPO や協同組合、何らかのミッションを掲げる団体といかなる連携をすすめるか。労働組合の新しい関係性と可能性が芽生えていて、ゆにふぁんはまさにその舞台です。

ゆにふぁんマップを見れば、各地域の労働組合、NPO、組織、団体と連携した支え合い・助け合い活動が可視化され、新しいお金の流れとしてクラウドファンディングの意義も鮮明になります。

ゆにふぁんという言葉の由来は３つくらいと理解しています。まずは社会に役立てるお金を集める「ファンド（fund）」ですが、さらに職場や労働組合を越えたつながりを楽しむという意味でのファン（fun）も忘れてはなりません。さらに労働組合のファンを増やしていくための着実なステップでもあります。ゆにふぁんという言葉に込められた思いをかたちにしつつ、今後のゆにふぁんがさらに発展していくことを期待しています。

社会に必要なプラットフォームへ

READYFOR 株式会社 代表取締役 CEO　**米良はるか**

ゆにふぁん２周年おめでとうございます。
READYFOR は、ゆにふぁんと、地域の社会貢献活動を応援するクラウドファンディングをともに運営させていただいています。今まで５件の案件をご一緒させていただき、その中でも社会的擁護を必要とする子どもたちを支援するための「若者おうえん基金」に対しては約 800 万円の寄付が集まり、たくさんのみなさまに共感をいただける活動となりました。

この資金を使い、日本中の児童養護施設や NPO 団体に食料や生活用品が送られました。支援者の中には、「子どもたちが生い立ちや自ら選ぶことのできない環境で、自分の未来を諦めないで欲しいと思っています。陰ながら応援しています。」など多くの想いのこもったコメントが寄せられました。

コロナ禍で社会的弱者がより追い込まれる状況になっている中、まだまだ支援の輪を広げていく必要性を感じています。連合さまは長きに渡り地域の社会貢献活動を広げるべくさまざまな取り組みをされています。その中でも、IT の仕組みを使って、地域に閉じず多くの人たちに広げていく取り組みであるゆにふぁんは、今後さらに社会に必要なプラットフォームになっていかれると思います。READYFOR もその役割の一助を担えればと思っております。

ゆにふぁんに感謝、そして希望を

津田塾大学客員教授　**村木厚子**

ゆにふぁんの活動がスタートして２年が経ちます。この間の実績は素晴らしいもので、全国で、たくさんの特色を持った活動がスタートしました。私自身も、NPO 活動に携わる一人としても、大変お世話になり、心から感謝しています。

しかし、この２年間は、私たちの社会がコロナと闘う試練の２年間でもありました。コロナ禍は深刻さを増しており、しかも、先行きがなかなか見通せません。そんな中で、情けないことに私自身も、エネルギーを奪われ、思考停止になってしまうことが何度もありました。そんな時に、ある日、ハッとさせられる言葉をかけられました。

「まだ、総力戦になってないよね」

その言葉を聞いて、そうだ、まだできることがあるはず、まだ手を貸してくれる人がいるはずと改めて気づきました。

ゆにふぁんは多くの人の多様な活動を見える化して、活動を始めようとする人の背中を押し、志のある人、行動を開始した人同士をつなぐことのできる仕組みです。この難局に、ゆにふぁんという仕組みができ上がっていたことに心から感謝します。この難局をみんなで力を合わせて乗り越えるために、ゆにふぁんが大きな力を発揮してくださることを心から祈念します。

社会参加で自らも幸せにするゆにふぁん

日本ファンドレイジング協会　代表理事　**鵜尾雅隆**

今の社会状況を考える際、「WHO（世界保健機関）が予見する 2030 年の世界最大の疾患が「うつ」である。」ということと、「OECD 調査では先進国の中で最も孤立化率の高いのが日本であった。」という２つの事実は大切だと思います。

幸福学で有名な慶應大学の前野教授は、人が幸福になる４因子の２つに「つながりと感謝」「やりたいことがあること」をあげています。労働組合が働く人の幸せを考えた場合に、つながりと感謝の関係が生まれて、一人ひとりが「やりたいことがある」という状況を創りだすことに貢献できることがこれまで以上に大切になってくると思います。

その観点からは、「ゆにふぁん」の取り組みにはとても期待しています。NPO 側からすると、これまでも様々な労働組合からのご寄付はとてもありがたかったのですが、このゆにふぁんの取り組みは、そうした様々な主体的活動や NPO の活動を一体として可視化し、かつクラウドファンディングや「いいね」を通じて応援し、参加する機会を多くの人に提供している点が特徴的です。社会課題解決の現場と労働組合や働く人たちをつなげる、支援しやすくなる、という機能を多元的に提供している「ファシリテイター」の機能を果たしています。「Facilitate」という言葉の語源的意味は「容易にする」ということにあります。多くの人が社会参加して自らも幸せにする、そうしたことを「容易にさせる」この取り組みを応援しています。

「社会課題解決」に労働組合が取り組んでいるなんて！？

リクルートワークス研究所主任研究員　**中村天江**

「ゆにふぁん」のサイトを初めて見た時、びっくりしました。クラウドファンディングや物品寄贈、ボランティアなど、賃上げや雇用維持を旗印にかかげる従来の労働組合のイメージとはまったく違う活動を紹介していたからです。とりわけ労働組合だけでなく、NPO や NGO の取り組みも紹介していることに、大いに驚きました。

しかしよく考えてみれば、近年、世界的に SDGs や ESG、ポスト資本主義など、多様なステークホルダーの共存共栄をめざす動きが活発になっています。そもそも人は、独りぼっちでは、長く頑張り続けることができません。個人が才能や可能性を発揮するには、労働組合や NPO といったキャリアの共助が必要なのです。

ところが、日本ではキャリアの共助が十分に普及していません（リクルートワークス研究所「つながりのキャリア論」）。働く個人の支え合いである労働組合。それが全国各地の NPO や NGO も支える。支え合いによる支え合い「ゆにふぁん」は、今の日本にまさに必要な仕組みといえるでしょう。

全国津々浦々の共助の活動を紹介する「ゆにふぁん」も、設立から２年たちました。これからは、支え合いの輪をさらに広げられるよう、より多くの方に「ゆにふぁん」を知っていただくことが期待されます。そのためには「ゆにふぁん」のプロモーションも大切です。

おわりに

「ゆにふぁん」で支え合い・助け合いの輪を広げよう

連合総合運動推進局 運動企画局局長　**畠山　薫**

ゆにふぁんレポートをご覧いただきありがとうございます。

このレポートは、２年間の活動を振り返り、ゆにふぁんマップの活用、支え合い・助け合い運動を通じて得た知識や経験などを、数字や写真、事例を用いて紹介しています。

連合がゆにふぁんを立ち上げた背景には、労働組合の「不条理に立ち向かう」「地域で働く人の頼りになる存在」といった潜在的関心に働きかけ、社会運動を「自らが創りあげる参画意識こそが望ましい社会をつくる」としながらも、参加・参画が少なく広がらないといった問題意識がありました。

既に実践されている地域に根ざした草の根活動、社会貢献活動を横に展開し、新しい活動システムを創造、構築、実践していくことで、連合運動を活性化させようと考えました。ボランティアや募金、物資支援を労働組合独自で活動しているものからＮＰＯ・ＮＧＯなどと連携している様々な活動を可視化・共有化して、参加・参画、共感につなげる、誰もがインターネットを通じて情報を得ることができる仕組み「ゆにふぁんマップ」を連合ホームページに開設しました。

私は２年前からゆにふぁんを担当し、まさに実践していく立場になりました。ゆにふぁんを知ってもらい、活動を可視化することに力を入れ、クラウドファンディングは手探り状態でした。新型コロナウィルスが猛威を振るいだした時、マスク募集や募金活動を特設ページに集約し、ＳＮＳも活用して支援を呼びかけました。感染拡大防止に沢山のマスクが医療機関や福祉施設などに寄附され、フードバンクへの支援も広がりました。全国各地から「志」と「信念（おもい）」が伝わると同時に、労働組合の行動力、連帯力、寄り添う心は、支え合い・助け合いの活動で育まれ、労働運動の原点なのだと思います。

多くの方にゆにふぁんマップをのぞいてほしいと思います。災害で被災された方へのカンパやボランティア活動、環境保護活動、食への支援、地域を元気にするお手伝いなど、「あっ！ こういう活動もあるんだ」「私も参加してみたい」という発見があります。そして「参加することが楽しい」「仲間がいて心強い」「社会を変えられる」という実感が得られるようなゆにふぁん運動に深化させ、支え合い・助け合いの輪を広げていきたいと思います。

月刊「連合」2020 年 3 月号（No.375）掲載

ねえ、つながっちゃお!!
ゆにふぁん活動事例集

ゆにふぁんマップをのぞいて!
さまざまな「支え合い・助け合い」活動が掲載されています。

ゆにふぁんマップでできること
- 情報共有
- ボランティア募集
- 物資支援の募集
- クラウドファンディング

社会貢献の分野
- 働く人を応援
- 貧困から守る
- 教育・子育てを応援
- 障がい・介護を支える
- **自然を守る**
- フードバンク・子ども食堂
- 地域を元気に
- 被災地を応援
- 動物を守る
- その他

第1回
【連合山口】秋吉台「火道切り」ボランティア

「ゆにふぁん」とは、労働組合独自で展開しているボランティア活動や、地域でお付き合いのあるNPO・NGOなどと連携した活動を〝見える化〟して、個人の意思で活動に参加することや、物資、資金などを支援することができる仕組み。「支え合うこと、助け合うこと」をもっと身近に、そして社会に広げていく。連載初回は、ゆにふぁんのクラウドファンディング実施第1号である、日本の宝「秋吉台」の伝統の山焼きを未来に継承するための連合山口「火道切り」ボランティアを紹介する。

秋吉台「火道切り」ボランティアとは?

秋吉台は四季折々の魅力にあふれる国定公園（4,502ha）で、うち 1,269ha は特別天然記念物に登録されている。東京ドーム約 1,000 個分の広さを持つ日本最大級のカルスト台地で、多くの観光客が訪れる。この雄大な自然を守り、維持するために山焼きを行っている。

ヨーロッパの広大な草原を想起させる美しい景色

山焼き

地域の営みとして100年続く山焼き

山焼きとは新しい草の芽がよく出るよう、山の枯草を焼くこと。土壌を豊かにし美しい草木を育てる。秋吉台では約 3 時間で 1,138ha の枯草を焼き尽くす。その準備として、山火事にならないよう「火道切り」を行っている。

【連合山口】秋吉台「火道切り」ボランティア 15年の活動で見えてきた課題
- 作業は自然相手で、実施が天候に左右される
- 急斜面もある山での作業のためケガや事故の危険性がある
- 毎年の経費が多額である

様々なリスクから、ボランティアの継続も困難に…。
そこで このままでは **日本の宝「秋吉台」** を守ることが難しくなってしまう。

“ゆにふぁん”に着目してみました。

<クラウドファンディングに挑戦 >

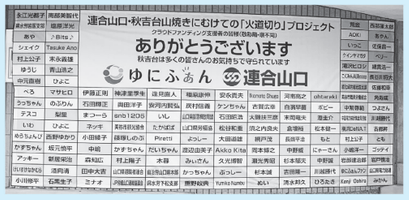
石灰石の点在する斜面を刈るための草刈り機の替え刃や鎌などの刃物類購入費、参加者に対するボランティア保険料、飲み物、昼食、現地までの移動にかかる経費などに使うため、ゆにふぁんのクラウドファンディングで資金募集を行った。
目標額80万円に対し127人の支援者から 104.3万円が集まった。この資金を活用し、16回目となる火道切りボランティアを2019年11月9日（土）に550名の参加のもと実施した。

日本の宝を守る活動が、今回も無事に実施された

日本の宝「秋吉台」を未来につなごう!

伊藤正則
連合山口会長

この活動は過疎・高齢化による人手不足で悩む地域の声に応えて始めたもので、連合山口のシンボリックな社会貢献活動として定着しています。
2020年2月14日には、山焼きの会場に「支援者ボード」を設置しました。ゆにふぁんを通じたみなさまからの温かいお気持ち・ご支援に心から感謝を申し上げます。



クラウドファンディングの支援者ボード

防火帯となる火道

秋吉台を守る気持ちを胸に

家族みんなで参加

火道切りとは、山焼きで火が周囲に燃え移るのを防ぐため、草を刈り、幅 6 ～ 8 メートル・長さ 21 キロもの防火帯を作る活動。
連合山口のボランティアがスタートしたのは 2004 年。それまでは地域住民で担っていたが、高齢化・過疎化、重労働による人手不足を支えようと動き出した。「秋吉台は山口県の、そして日本の宝。100年も続く伝統ある山焼きを継承したい!」と毎年 500 ～ 600人の組合員・家族などが参加している。

月刊「連合」2020 年 4 月号（No.376）掲載

ゆにふぁんマップをのぞいて!

運営団体：公益社団法人ユニバーサル志縁センター（http://www.u-shien.jp/）

ご協力をお願いします

村木厚子
運営団体顧問

少子化が大きな課題と言いながら、生まれてきた子どもを応援できているでしょうか。とりわけ厳しい環境で育った子どもには、丁寧な支援が必要ですが、児童養護施設やNPO法人などの心ある人たちの「持ち出し」の資金と情熱で成り立っているのが現状です。どうか皆さんのお力を貸してください。

連合も “ゆにふぁんクラウドファンディング”を応援しています

連合の中央執行委員会にて。
ユニバーサル志縁センターの池本専務理事（中央）

プロジェクト名
施設や里親の下で育った若者たちをサポートする若者おうえん基金

締　切
2020年5月12日（火）23:00まで

目 標 額
300万円

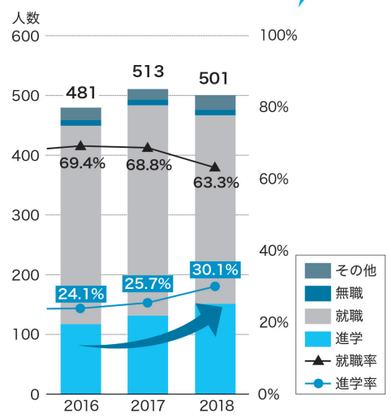
詳しくはこちら

伴走型支援で若者おうえん!

施設などを離れる若者に一対一で寄り添う、伴走型支援をさまざまな団体が行っている。「若者おうえん基金」は、そうした団体への助成を通じて若者を支援している。また、団体・個人、協同組合、学識者などと連携して、就労・キャリア支援、政策提言などのサポートを行っている。

自立支援・退所後支援の充実によって進学率は上昇し、進路の選択幅が広がることが期待されている。

■児童養護施設退所直後の進路状況の推移



出所：「全国児童養護施設調査2018社会的自立と支援に関する調査」より連合作成

ねえ、つながっちゃお!!
ゆにふぁん活動事例集

ゆにふぁんマップでできること

- 情報共有
- ボランティア募集
- 物資支援の募集
- クラウドファンディング

社会貢献の分野

- 働く人を応援
- 貧困から守る
- 教育・子育てを応援
- 障がい・介護を支える
- 自然を守る
- フードバンク・子ども食堂
- 地域を元気に
- 被災地を応援
- 動物を守る
- その他

第2回

施設や里親の下で育った若者たちをサポートする「若者おうえん基金」

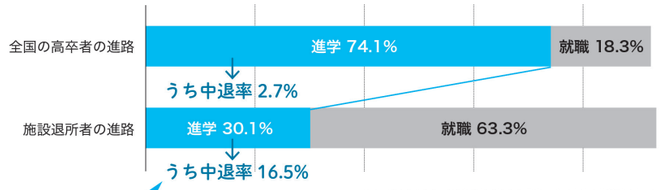
「若者おうえん基金」とは?

児童養護施設や里親など、「社会的養護」と呼ばれる公的な支援のもとで育つ子どもたちは約４万6000人。貧困や虐待、両親の不慮の事故・病気など、幼いころにつらい経験をしている人も多く、施設等を出た後も、学び、働き、暮らすうえでもさまざまな困難に直面している。そのような若者たちが、社会の中で自立して生きていくことを支援する基金である。

なぜ支援が必要なの?

18歳になると施設や里親家庭を出なくてはならない。進学・就職をする際には、学費や生活費なども自分で働いたお金でまかなうなど経済面の負担が一身にのしかかってくる。また、悩みや将来についての相談ができる大人たちがいないことが、就学や就労に大きく影響している。

■児童養護施設退所直後の進学状況の比較



出所：2012、および2018「全国児童養護施設調査 社会的自立と支援に関する調査」より連合作成

生活費・学費のため、多くの時間アルバイトせざるを得ず、学業への支障や心身不調との連関性が推測されている。

「ゆにふぁん」とは、労働組合独自で展開しているボランティア活動や、地域でお付き合いのあるNPO・NGOなどと連携した活動を“見える化”して、個人の意思で活動に参加することや、物資や資金などを支援することができる仕組み。「支え合うこと、助け合うこと」をもっと身近に、そして社会に広げていく。第２回は、連合東京推薦の公益社団法人ユニバーサル志縁センターが運営する「若者おうえん基金」を紹介する。

月刊「連合」2020 年 6 月号（No.378）掲載

コロナ対策の

全国各地の取り組みは ゆにふぁんマップを!

https://www.jtuc-rengo.or.jp/unifan/covid19-index.html

みんなの想いを届けよう。

～あなたの思いやりを “連合ゆにふぁん”で～

新型コロナウイルスで助けを求めている人が大勢います。私たち一人ひとりができることはなんでしょうか。それは一人ひとりの“支え合いたい”“助け合いたい”という想いを届けることです。連合30周年を機に立ち上げた「ゆにふぁん」の仕組みを使って、どうかみなさんの力を貸してください。今すぐアクセスしてください！

新型コロナウイルスによって 助けを求めている方々へ 連合が“支援の輪”を広げます

募金活動にご協力を!

コロナ禍で働くことができなくなった、収入が激減した。そんな方々のより所がフードバンクや子ども食堂です。ここへ資金援助をしませんか？ 募金活動にもぜひご協力ください。

連合東京

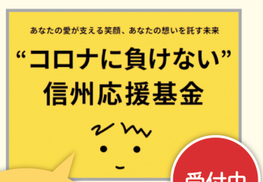
今できること、それは助け愛

- フードバンクや子ども食堂を支援します

2020年7/31まで

公益財団法人 長野県みらい基金

"コロナに負けない" 信州応援基金



受付中

連合長野が支援

公益財団法人あすのば

新型コロナで困窮している子どもへ緊急支援の給付金を!

2020年7/31まで

情報労連が支援

【2020年6月23日現在】

マスク等の募集活動に協力しよう!

連合北海道の「不要のアベノマスク捨てないで！」をはじめ、各地でマスク募集のうねりが起きています。連合滋賀では、県から「作業現場で使用するマスク、防護服、手袋など現場で備蓄しているものをわけて」との要請に応え、医療機関に無償提供しています。その他、多くの地域でマスクに関わる活動を展開しています。障がい者支援施設のほか、児童館、市役所、病院、県にも寄贈しています。みなさんの身の回りにも、医療用の防護服、ゴーグル、フェイスシールド、マスク、ナイロン手袋、キャップなどありませんか？

連合静岡

思いやり マスク運動

2020年7/31まで

連合滋賀

滋賀県に対する医療用防護服等衛生用品の提供 協力

受付中

連合長崎

子ども食堂・福祉団体等へのマスクの寄付

2020年7/31まで

各地でマスク等を募集・寄贈しました!!

マスク等に関する取り組みをしている地方連合会

連合北海道

不要のアベノマスク 捨てないで！

2020年6/30まで

フードバンクを支援しよう!

多くの地域で地方連合会がフードバンクへの支援を行っています。食品や防災備蓄品の募集の他、食品の仕分け等のボランティアも募集しています。新型コロナに立ち向かう人々を“食”で応援しましょう！

フードバンクかながわ

受付中

「もったいない」を「分かち合い」・「ありがとう」へ!

- 新型コロナに立ち向かう医療従事者への応援を行っています
- 子ども食堂が閉鎖され困っているご家庭へ食品の配布を行っています
- ひとり暮らしの学生に、お米、レトルト、缶詰、カップ麺などを提供しています

連合神奈川が支援

セカンドハーベストジャパン

たった一つの缶詰でも、空腹を満たす以上の「希望」が詰まっています!

- イベントが中止となり、使用するはずだった食品を寄贈
- 食品を賞味期限ごとに仕分けするボランティアを実施しました

フード連合が支援

そのほか、地方連合会の岩手、新潟、山梨、静岡、愛知、岐阜、大阪、徳島、山口でもフードバンクと連携しています

月刊「連合」2020 年 8 ・ 9 月合併号（No.379）掲載

Q＆Aの
一例を紹介!

実際のページは
以下をご覧ください

Q 保護者 **学校に行かなくなってから、子どもの落ち着きがなくなってきました。夜もあまり眠れていないようです。どのように接したら良いでしょうか。**

A 人は、危機が迫ると、心拍を早めて立ち向かおうとします。それがイライラや落ち着きのなさ、眠りを妨げてしまっています。「毎日、コロナウイルスのニュースで心配だよね、こんなときは誰でも、心と体が不安定な状態になることがあるんだよ。全力をあげて立ち向かおうとしているんだよ」と話してあげましょう。気持ちを落ち着ける呼吸法や一度身体に力をいれてから、一気に力をぬくリラックス法など、親子でリラックス法を練習するのもいいでしょう。

【参考】・社会応援ネットワーク「災害時や緊急時に～すぐできる！ストレスマネジメント実践集」
・国立成育医療研究センター「新型コロナウイルスと子どものストレスについて」

プロジェクトの今後とクラウドファンディング

今後は、再開された学校現場へのヒアリングなどを通じて内容をアップデートし、「第二波」の襲来にも迅速に対応できるような情報発信を続けることが求められる。また、「心のケア」は平常時においてもいじめや不登校への対応に有用ともされている。様々な分野の専門家に監修を依頼し、情報掲載とネットワーク拡大を通じて、子どものケアに関するポータルサイトや新時代の専門メディアへ発展していくことも期待される。

学校での取材時の様子

2020 年 4 月の特設ページ新設にあたり、専門家、イラストレーター、ウェブデザイナー、編集者などが無償で全面的に協力した。継続的に確かな情報を発信するため、現在クラウドファンディングに挑戦している。

既にクラウドファンディングで ご支援いただいた方の声

専門家の方々の知見で、子どもたちの心が明るくなればと切に願っています。

誰かが行動を起こさなければならないこと、頭では分かっていても、なかなかできない。ともに一歩踏み出すきっかけを作ってくれました。ありがとうございます。

連合も

このプロジェクトを応援しています。
“ゆにふぁんクラウドファンディング”
にご協力をお願いします。

プロジェクト名
【新型コロナ】【災害ストレス】＃子どもの心のケアプロジェクト

締切迫る
締　切
2020年9月7日（月）23:00まで

目 標 額
112万円

詳しくはこちら

ねえ、つながっちゃお!! ゆにふぁん活動事例集

第４回
社会応援ネットワーク
【新型コロナ】【災害ストレス】
＃子どもの心のケアプロジェクト
クラウドファンディング

「ゆにふぁん」とは、労働組合独自で展開しているボランティア活動や、地域でお付き合いのある NPO・NGO などと連携した活動を“見える化”して、個人の意思で活動に参加することや、物資や資金などを支援することができる仕組み。「支え合うこと、助け合うこと」をもっと身近に、そして社会に広げていく。

第４回は、 日本教職員組合推薦団体の社会応援ネットワークが運営する「【新型コロナ】【災害ストレス】＃子どもの心のケアプロジェクト」を紹介する。

子どもや教職員・保護者の心を支える「社会応援ネットワーク」

「私たちにできるのは、子どもたちへの励ましのメッセージを送り続けること」。東日本大震災後、そんな思いで、全国の小・中学校に無料配布している「子ども応援便り」編集部の有志が立ち上げた団体が「社会応援ネットワーク」だ。設立以来、被災地の子どもたちや教職員、保護者の心のケアに取り組むほか、防災教育やパラスポーツ体験授業など教育現場の声に応えた活動を続けてきた。

全国の小・中学校で活用される
「子ども応援便り」

防災教育の教材開発や
普及にも取り組む

「＃子どもの心のケアプロジェクト」とは？

新型コロナウイルスの感染拡大により全国的に小・中学校が休校となり、子どもたちを取り巻く状況は一変した。感染対策や心のケアに関する真偽が確かではない情報が飛び交い、団体には「どの情報を信じれば良いのか」など教職員や保護者から不安の声が多く寄せられたという。

そこで「学校支援を続けてきた自分たちだからこそできることを」と、心のケアに詳しい各分野の専門家の協力のもと、Q＆A 形式で保護者や教職員の悩みに答える特設ページを開設。「正確で整理された情報」を配信することで、刻一刻と変化する子どもたちの問題に対して、対処できるようにと本プロジェクトは開始された。

子ども応援便り WEB版

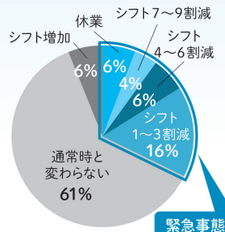
子ども応援便りのホームページ上で発信

ゆにふぁんマップをのぞいて！

月刊「連合」2020 年 10 月号（No.380）掲載

新型コロナにより大きな影響を受けている若者

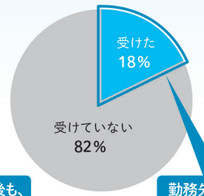
■緊急事態宣言解除後の就業時間やシフトの状況



緊急事態宣言解除後も、3 割以上の人はシフトが回復していない

出所：株式会社エービーシーズ「第２回 新型コロナウイルスの影響に関するアンケート調査」

■新型コロナウイルスの影響による勤務先からの補償



勤務先から何らかの補償を受けた人は約 2 割に留まる

出所：株式会社マイナビ「新型コロナウイルスによる非正規雇用への影響調査【就業者編】」

日本若者協議会に寄せられた声では…

緊急事態宣言解除後もバイトができず、補償もなく生活が苦しい

学校もバイトも休みになって気分が落ち込みうつ状態だ

非正規雇用やアルバイトとして働くことが多い若者は、新型コロナによって、より大きな影響を受けています。飲食業などを中心に、緊急事態宣言解除後も客足が戻らずにシフトが回復しない、休業になっても勤務先から補償が受けられないなど直接的な影響が大きい若者たち。学生の就職活動への影響や、非正規雇用で働く割合が高い若者の雇用不安の増大も懸念されています。

「悩みの共有」から「労働相談」へつなぐサイトの開設へ

新型コロナの影響で、働く悩みを抱える若者たち。その多くは、友達同士での悩みの共有や、SNS や掲示板への投稿により一時的に悩みを緩和するだけで、解決にはつながらず一人で苦しんでいます。「労働相談」は若者にとって身近ではなく、選択肢としては浮かばず、「自分が我慢すればいい」と思ってしまうのが現状です。そこで、より多くの若者を、労働相談や解決に向けた専門的な知識へとつなぐサイトを制作するプロジェクトを立ち上げました。

「悩みの共有」から「労働相談」へつなぐサイト

サイトコンテンツイメージ

①悩み投稿掲示板機能
- 若者が気軽に安心して悩みを投稿。
- 同じ悩みを持つ若者同士が共感。

②投稿される悩みに対する対策コラムやＱ＆Ａ
- 解決策のコラムや、よくある悩みに関する情報提供。

つなぐ → 連合労働相談窓口・専門家窓口へ

集まった若者の声を、アンケートや調査なども活用しながら、若者の政策提言へとつなげていきます。

サイト制作のための寄附金をゆにふぁんで募集中!

プロジェクト名
新型コロナの影響で働く悩みを抱える若者を労働相談に繋ぐ悩み相談プラットフォーム

団体名
一般社団法人 日本若者協議会

詳しくはこちら

ねえ、つながっちゃお!!
ゆにふぁん活動事例集

ゆにふぁんマップでできること
- 情報共有
- ボランティア募集
- 物資支援の募集
- 募金・寄附金
- クラウドファンディング

第５回
日本若者協議会「新型コロナの影響で働く悩みを抱える若者を労働相談に繋ぐ悩み相談プラットフォーム」

社会貢献の分野
- 働く人を応援
- 貧困から守る
- 教育・子育てを応援
- 障がい・介護を支える
- 自然を守る
- フードバンク・子ども食堂
- 地域を元気に
- 被災地を応援
- 動物を守る
- その他

「ゆにふぁん」とは、労働組合独自で展開しているボランティア活動や、地域でお付き合いのあるＮＰＯ・ＮＧＯなどと連携した活動を〝見える化〟して、個人の意思で活動に参加することや、物資や資金などを支援することができる仕組みです。「支え合うこと、助け合うこと」をもっと身近に、そして社会に広げていきます。第５回は、連合本部推薦の日本若者協議会「新型コロナの影響で働く悩みを抱える若者を労働相談に繋ぐ悩み相談プラットフォーム」を紹介します。

若者の声を社会へ届ける日本若者協議会

日本若者協議会とは、若者の声を社会へ届けることを目的に、高校生や大学生が中心となって活動しています。各政党との意見交換会や日本版ユース・パーラメント（若者議会）の開催など、多彩な政策提言活動を行っています。これまで、被選挙権年齢の引き下げ、供託金の引き下げ、審議会での若者比率の上昇、子ども・若者省の設置などでは、多くの場面で数多くの若者の声を反映してきました。また、超党派の「若者政策推進議員連盟」の事務局を担っています。

連合と意見交換会を開催

連合とは 2020 年 2 月に、若者がブラックバイトをはじめ様々な労働問題に直面していることへの問題意識から意見交換会を開催しました（月刊連合 NO.376 掲載）。また、「YouTube 労働教育講座」動画を連合との協力で制作しています。

YouTube で「日本若者協議会」のチャンネルを登録してね

ゆにふぁんマップをのぞいて!

月刊「連合」2020 年 12 月号（No.382）掲載

ねえ、つながっちゃお!! ゆにふぁん活動事例集

第6回

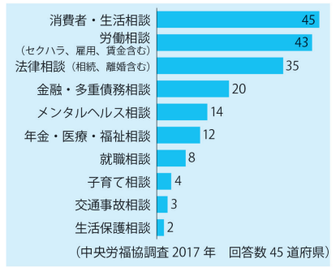
中央労福協「ろうふくエール基金（生活・就労応援基金）」

「ゆにふぁん」とは、労働組合独自で展開しているボランティア活動や、地域でお付き合いのあるNPO・NGOなどと連携した活動を〝見える化〟して、個人の意思で活動に参加することや、物資や資金などを支援することができる仕組みです。「支え合うこと、助け合うこと」をもっと身近に、そして社会に広げていきます。
第６回は、連合本部推薦の労働者福祉中央協議会（中央労福協）「ろうふくエール基金（生活・就労応援基金）」を紹介します。コロナ禍で仕事や住まいを失うなど、困難を抱えた人たちを支援する活動です。

労働者福祉中央協議会（以下：中央労福協）とは

労働団体、労働者福祉事業団体、地方労福協で構成する、労働者福祉活動のための中央組織です。現在は生活困窮者への支援強化や奨学金制度の改善など様々な社会課題に対して、運動や政策要求、自主福祉活動の両面から取り組んでいます。
また、地域においては、地方労福協が幅広いネットワークのもと、様々な相談を受けるライフサポート活動や生活・就労支援、フードバンク活動の普及・促進などの取り組みを展開しています。

奨学金に関する全国一斉相談（2020年11月6日）



ライフサポートセンターで年間25,000件の相談

コロナ禍での生活困窮者支援の状況

コロナ禍による休業・失業、生活困窮、住居喪失などの困難を抱える相談者。中には身寄りもなく数日間何も食べていない人、困窮のうえ体調不良だが通院代にも困っている人など、相談の現場には悲痛な現実が押し寄せます。
こうした状況で、相談員・支援員たちは感染リスクを負いながら、自らも不安定な雇用の中で急増する相談者に寄り添い、力になるために最前線で奮闘する日々が続いています。

急増する困窮者からの相談に対応する新潟県労福協の相談員

エール基金からの助成に感謝し「よりよい支援に活用したい」と沖縄県労福協のみなさん

コロナ禍の危機を乗り越える！ろうふくエール基金

働く仲間や地域の人たちが連帯し、様々な困難を抱えた人たちを支援するため、2020 年7月より「ろうふくエール基金（生活・就労応援基金）」がスタートしました。広く寄附を募り、この危機を乗り越えるため基金を活用します。

基金の使途

1 緊急生活支援
相談者を公的援助につなげるまでの食料・宿泊等の緊急支援や、就労支援訓練時の交通費など、国・自治体からの補助がない支援活動を助成します。

2 生活困窮者自立支援事業の相談員・支援員への応援
支援者が疲弊し相談崩壊しないために「支援する側」への感謝の気持ちを込めてエールを送り、連帯の応援金を届けます。

3 就労支援、職業訓練、雇用創出、居住支援などの事業への助成
新規事業の立ち上げ、またはコロナ禍に対応した事業の拡充を促進するため、その経費の一部を助成します。

すでにいただいた寄附金を活用し、上記の1～2から助成を開始しました。
緊急生活支援では次のような支援を行いました。

- 数日間食事をとっていない方への食事・宿泊の支援
- 困窮に加え体調不良のため受診の必要があり、通院代、薬代を支援
- 乳児を抱えた外国人世帯が、コロナ禍により仕事がなくなり、ミルク代・おむつ代を支援
- 就職活動に通信手段として必要な携帯電話がないため、貸出用プリペイド携帯電話のチャージ代を支援
- 地元に帰って生活を立て直すため交通費を支援
- 就労準備プログラムの参加者に弁当を支給

など

現在もコロナ禍による雇用・生活への不安は払拭されていません。
助けを求める人たちに持続的に支援を届けるためにも、引き続き皆さまのご協力が必要です。

寄附金のご協力をお願いします

団体名
労働者福祉中央協議会（中央労福協）

プロジェクト名
ろうふくエール基金（生活・就労応援基金）

口座振込のほか、
クレジットカードにも対応しています

相談員・支援員からのメッセージ

「食べるものが無い」「住まいを失った」等の深刻な相談が寄せられています。困窮している方の最低限の生活を何とか守っていきたい。

コロナ禍で感染危険を感じ、精神的に辛く感じることもある中、皆さまの支援の気持ちに、涙が出るほどうれしく感じました。

相談支援員は、心身ともに元気が必要です。皆さまのエールで相談者とともに元気になれるようがんばります。

ゆにふぁんマップをのぞいて！

月刊「連合」2021 年 3 月号（No.384）掲載

「東日本大震災から10年」の取り組みは
ゆにふぁんマップを!

https://www.jtuc-rengo.or.jp/unifan/support-index.html

一人ひとりの力が
大きな力になることに気づいた10年。
「今から」できること。
「今だから」できること。

東日本大震災から10年 つなげよう未来へ。

ゆにふぁん

「ゆにふぁん」は、労働組合や連携する団体が行う「助け合い・支え合い」のさまざまな活動を可視化・共有化して、誰もが心の中にある「志」をつなげ、より大きな力を発揮するための仕組みです。
今号は、ゆにふぁんマップ掲載中のプロジェクトから、東日本大震災の復興支援や防災の取り組みを紹介します。

防災の取り組み

ボランティアの養成や救命道具の使い方を学ぶ

救命講習会の受講
JP 労組東海地方本部

急な救護活動ができるように、消防署で心肺蘇生法やAED、止血法を学び、実践練習をしています。

災害ボランティアセンター設置・運営訓練
連合福岡・北九州地協

北九州市社会福祉協議会の講習会へ参加し、災害ボランティアセンターの運営訓練や機能と役割について体験を通じて学んでいます。

JBUパワーバンク（災害ボランティア）活動
基幹労連

「JBUパワーバンク」はボランティアメンバーを養成する基礎講座を開催、災害発生時にはメンバーを被災地に派遣しています。

クラウドファンディング達成

生き残ったマツの子どもたちを育てよう!
ゆりりん愛護会

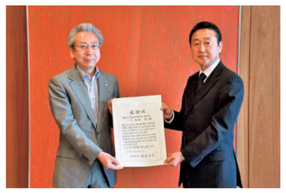
- 被災した仙台市荒浜海岸で防災林を再生するため、マツ苗植樹を行います。
- 体験を通じ、地域の子どもたちの環境教育にもつながります。
- 1 月 29 日、目標金額 100 万円に対し 119.6 万円で達成！マツ苗の購入などに使います。

情報労連が推薦

復興支援の取り組み

植林活動、清掃活動、募金活動など

東日本大震災被災者支援活動
連合北海道・
石狩地協札幌地区連合会



「札幌市さぽーとほっと基金」へ寄附金贈呈。北海道に避難した被災児童・生徒への学習支援や、福島県内の青少年団体等の札幌訪問をお手伝いしています。

復興の森
連合秋田

宮城県内（名取市、東松島市）の海岸防災林の再生に取り組んでいます。クロマツやヤマザクラの苗木を植栽し、これまで延べ 238 名の組合員が参加しています。

海岸林再生プロジェクト 10カ年計画
公益財団法人オイスカ

連合宮城が推薦

津波で壊滅的な打撃を受けた、全長5㎞×幅200mの名取市海岸林を再生する活動です。これまで全国からボランティア 12,000人が参加。現在もボランティア・寄附金募集中です!

JPsmile プロジェクト& 心ひとつに運動
JP労組東北地方本部

薄磯海岸清掃を実施。さらに「いわき震災伝承みらい館」での学習で、震災を風化させない取り組みを行っています。

「ハタチ基金」へのカンパ
電力総連・電発総連

震災発生時に 0 歳だった赤ちゃんが 20 歳を迎えるその日まで、子どもたちに寄り添い継続的に支援を行う「ハタチ基金」へ毎年カンパ活動を行っています。

原発事故避難の 飯舘村復興支援活動
特定非営利活動法人
BHN テレコム支援協議会

避難直後から 6 年間は仮設住宅でのコミュニティ活動などを、避難指示解除後は帰村支援などを実施しました。

情報労連が推薦

ゆにふぁん レポート Stand up ～ゆにふぁん２年のあゆみ～

発行者：日本労働組合総連合会（連合）
ゆにふぁん事務局（運動企画局内）
unifan@sv.rengo-net.or.jp
〒101−0062 東京都千代田区神田駿河台３−２−11
発　行：2021 年 10 月 1 日

日本労働組合総連合会（連合）